

ハリバッタ・ジャータカマーラー研究（七）：第 九、二一、二九、三一、三三話の和訳

岡野， 潔
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門：教授

<https://doi.org/10.15017/7178792>

出版情報：哲學年報. 83, pp.1-57, 2024-03-18. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

ハリバツタ・ジャータカマーラー研究（七）

—— 第九、二二一、二二九、三二一、三三三話の和訳 ——

岡野 潔

『ハリバツタ・ジャータカマーラー』はまるで色とりどりで多種多様の高級チヨコレートの粒が沢山入ったチヨコレート箱のような文芸作品である。全三四話（もしくは全三五話）^①のどの章も高い完成度を誇り、韻文・散文の隅々まで詩人の職人的な技巧を凝らして作られており、どの文も切れ味よく言葉が明瞭で、無駄がない。インド仏教の千年にわたる梵語の詩作の歴史の最盛期のみ存在しえた作品である。

このような作品が、完全無欠な形で梵文の全テキストが今に伝わっていないのは残念なことである。本来のテキストの姿は、作品の完訳である蔵訳（チベット語訳）から推測できるが、その作品全体の約八割にあたる梵文が現存の梵語写本（AとB）から知り得ることが出来るため^②、その約八割のテキストがシュトラウベ博士によって新しい梵文校訂本として出版された。梵文の全体の二割が欠落しているため、章の中には当然、不完全な形でしか梵文が知り得ない章や、梵文が全く得られていない章もある。そのため、私はこの『哲学年報』誌上での一連の翻訳の発表にあたって、梵文が欠けていない章を先に訳出してゆく方針を立て、梵文の欠損がある章は後回しにしてきた。しかし連載の第六回目以降には、梵文が欠けてない章はもう残ってない。第七回目となる今回の発表では、私は第九、第二一、第二九、第三一、第三三の五つの章を訳すが、そのうちの三つの章（九と二九と三三）はどれも梵文の欠損部をもち、二つの章（二二と三二）はどちらも梵文が皆無の章である。しかし梵文の欠けている箇所はすべて蔵

訳から補って訳したので、一応私の和訳の上ではどの章も欠損部は無い。その蔵訳はその訳自体が良質のものではなく^③、そこからの和訳は多数の誤訳の危険を避けて通れないので、蔵訳による補填の箇所にも誤訳があってもどうかご寛恕いただきたい。この和訳で文頭や段落の初めにアステリスク(*)を付けた箇所が、私が蔵訳から補って訳した所である。

さて今回ここに訳す五つの話が、ジャータカマーラーの作品構成法である「六つの波羅蜜」区分のどれに属するかを見てみよう。まず第九話ブラフマダッタ王は、「布施の波羅蜜」(完全なる布施)に属する話であり、人民に対して憐れみ深い理想の王が飢饉の時に実に実行困難な布施の行為を行ったことを物語る。ハリバッタの布施波羅蜜に属する話では第二、第四、第六話でも飢饉の悲惨な状況における布施が語られている。

第二一話ダルダラ蛇は、「忍辱の波羅蜜」(完全なる忍辱)に属する話であり、主人公の蛇とその弟がいわれの無い侮辱・悪口をひたすら堪え忍んだ忍辱行を物語る。忍辱という徳目を示す例話として、ハリバッタがこれを題材に選んだ理由がよくわかる内容の話である。

次に第二九話劇団の娘ニルパマー、第三一話隊商主スヤートラ、第三三話シャクラ(帝釈天)は、どれも「智慧の波羅蜜」(完全なる智慧)の区分に属す話であり、それらの話はハイライト場面で主人公が智慧の言葉を語るといふ点で共通している。

第二九話のニルパマーの話は、舞踏劇(ナーティヤ)の女優である主人公の女性が舞台の上でとっさに見事に語った一詩節の智慧の言葉が、演劇の師匠・苦行者の若者・二人の商人・一人の大臣・王子の、計六人の男たちに心からの反省を与え、人生において誤った方向に進みかかったそれぞれの男たちが各自の行動を道徳的に正しい方向へ向け直す決断をなすきっかけになり、更にそこで観劇していた王も結果的に王位篡奪のための暗殺計画から命を救われることになって、彼女は王からの感謝と称讃を得たという話である。この話は民話学上、珍しい話型をもって

いる点で注意される。

第三一話の隊商主スヤートラの話では、遊郭の最高格の遊女である絶世の美女バドラーが主人公スヤートラを訴えた裁判の場で、被告の主人公が語った「美貌は日々、目減りしてゆく」という、人がもつ美と若さを驕る心を戒める智慧の言葉が、その裁判に列席した人々にうなずきと反省を与える。この話では作者ハリバッタが見た当時の遊郭(娼楼)の人々の様子が語られていて興味深い。

また第三三話シャクラ(帝釈天)は、苦行林で一匹の野生の仔象を愛する一人の牟尼が、母象を亡くしたその仔象を心配して、愛情のあまり悩苦するのを見て、菩薩であるシャクラが一人の婆羅門に化け、智慧の言葉をもってその仙人の愛情の苦しみを戒める話である。この話は、ハリバッタがもつ「動物好きの視線」と「自然に溢れた苦行林への憧憬」がその筆致によく表れている、愛すべき章である。

ハリバッタは作品において芸術性を最も重視した書きぶりを有する点で、彼以前のアーリヤシューラなどの仏教詩人とは一線を画す存在と見なすべきであろう。彼はソースとなった伝承を大胆に変え、本来の伝承がもつ話型や細部の表現に束縛されず、話が聴衆の感情に与える効果を見定めながら、必要とあらば原典になかった叙情的表現も付け加えて、常に聴き手の心情に寄り添うような書き方をする。またハリバッタは初めの布施波羅蜜の区分の章(第一一―一話)では有名な説話を多く取り上げるが、その後の三分の二はあまり知られていない説話を取り上げることが多くなり、特に第二六話以降の禪定・智慧波羅蜜の区分の話になると必ずしもすべての章で仏教徒の伝承の内部分だけから話の素材を見つけているとは限らないかも知れない⁽⁴⁾。そこでは彼は詩人として、アシユヴァゴーシャの『ブツダチャリタ』に見られるように、婆羅門系の教養的な神話伝説などの伝統と仏教系の固有の伝統とはある程度共存しうると見る融和的な立場から作品を作っているように思える。

ハリバッタの作風は先行するアーリヤシューラたちから進んでいっそう優美になり、長い複合語の修飾句を数多く並べた凝った散文、複合語においても意味の明晰さを失わない文体、仏教梵語的な語彙が少ない正確な古典語の使用などの特徴をもち、時代的に彼と近いカーリダーサなどのヒンドゥー教詩人のカーヴィヤ作品へ近づいている感じがすることから、四世紀中頃のカーヴィヤ作家たちによって強く影響された形で、彼は新しい時代のジャータカマーラーを作ろうとした様に思われる。

第九話 ブラフマダッタ王ジャータカ⁽⁵⁾

たとえ自分がつらい思いをしても、布施の果を知る者なら、布施を与えます。田畑の土地で苦勞して働く者は、種子が果実をもたらすであろうことを確信しているのです。(九・二)

◇ このように伝え聞いています。――王都ヴァーラーナシーにおいて、(a) 政略と軍勢力と勇敢さによって周辺一帯の他の王たちを支配し、(b) 転輪王の如くに抵抗にぶつかることなく進む支配の車輪を有し、(c) 四項目の心理テスト(忠実度・財への無執着・性愛の自制・勇氣)により大臣たちを検視し、(d) 学識・道徳性・喜捨(氣前のよさ)などの諸徳性を宝藏のように持ち、(e) 乞い求める者たちには平等に財を分け与え、(f) 白い宝石の欠片のように純白に輝く名声は海の彼方まで達し、(g) 利他の達成のために絶えず努力し続けている、(h) 偉大な知性をそなえた、ブラフマダッタという王が、菩薩(釈尊の前世)として、おりました。

「今、誰の不幸を取り除いてあげようか。財〔を施すこと〕によって誰を喜ばせてあげようか。誰を幸せに至る道に立たせてあげようか。」――これがその王の恒常的なあり方でした。(九・二)⁽⁶⁾ (一八・七)

〔輪廻的〕生存を断ち切るため、正しい道に自分自身を立脚させようと願う、偉大な心の者たちには、利他行以

外に、他になすべきいかなる活動もないのです。(九・三) (一八・八)

◇ その地において、王が正法にもとづき国を治めていたにもかかわらず、極めて猛烈な大飢饉が或る時に起こりました。その地方で稀に生じるわずかな雲による降雨すら途絶えてしまった結果、萎れた瓢箪のつるの広がり、屋根の半分が覆われてしまっている家、空になった穀物倉庫に穴から入り込んだ鼠たちによって絶えず持ち出されている稲のみ殻が点点と壁際に散らばっている家、すりこぎや攪乳棒の音が消え失せてしまった家、野菜の鍋が竈の上に載せられて茹でられてゆくのを飢餓に瘦せて泣いている幼な子たちがじっと目を凝らして見つめている家、「食を乞う」客人たちが門前に居ることがなくなった家、少女たちがすっかり萎れた野菜を庭の畑で採り集めている家、大半が死んだ中でまだ生き残っている衰弱した牛たちがじっと坐り込んだままでいる乾いたわずかな牛糞の山のみが置かれた牛小屋がある家、夜になると灯明(「油」)が無い(「部屋に」)暗闇が入り込んで人が動き回ることが出来なくなった家、——そんな、汚いぼろぼろの衣服に身を包んだ貧窮の人々が暮らす、まるで霜に打たれた池の蓮たちのような有様の家々は、かつての輝かしさをもう失っていました。

その時、民衆は王のもとにやって来て、言いました。

「シャクラ(神々の王インドラ)の如き王であるあなた様が、民を益するために努力を惜しまず活動しておられるのに、これらの人民が飢餓の火に苦しみ、消耗して瘠せ衰えた体で坐り込んでしまっているのは一体どうしてなのでしょう。か。」(九・四)

その民が汚いぼろぼろの服を着て、黒ずみ荒れた肌をし、飢えの熱苦に苛まれながら、なすべき仕事もなくなるのを王がうち眺めた時、悲しみのあまり王の両目から涙が溢れました。(九・五)

◇ その後、かの王は「次の」豊作が来るまでにかかる時の長さを認識し、穀物倉庫から「国民の人数分だけの」一定量の穀物を運ばせると、彼の国民に毎日それぞれ握り飯を一つずつを配りました。(王)自らは二口分だけを食

べました。しかし民の総数が数えられた時に、或る一人の婆羅門が「そこに」入っていませんでした。その者は長い間経ってからその事態に気づき、「王宮に」やって来ると菩薩の前で、「生きてゆくことの」厭嫌と悩苦の言葉を次のように語りました。

「人の世は、『ああ』と嘆き呻く声に満ちています。親友や身内との別れの故に、また希望が達せられない故に、あるいは様々な災の害の故に。」〔九・六〕

人に仕えることの苦に打ち負かされている者が、さらに人に施しを懇願しなければならぬことは、苦しみをさらに増大させています。それは長い道に疲れ切っている者の眼前に、さらに岩山の登りがあるようなものです。〔九・七〕

望む成果を得られないで苦を味わっている人々を、かの死神はのろのろ働いて〔徒に〕ひどく苦しませています。〔九・八〕

多くの人が愚かしくも『幸せへの期待』という高い高い建物を登りつつある時、彼らの前には『苦しみ』の幾重もの階段がひたすら増えてゆくばかりです。〔九・九〕

生じては滅するこの一切のものは苦しみに他なりません。それにもかかわらず、愚かな者たちは、幸せがあるという思いをもち続けるのです。〔九・一〇〕

もし『心』という象使いが、『憶念』（マインドフルネス）の力という鉤棒を愚かにも手放してしまうなら、苦の原因となる「五種の」『感覚器官』の象たちは彼を遠くへと運び去ってしまいます。〔九・一一〕

炎暑の季節に疲れ切っても、チャータカ鳥^①は地面の上にある水を飲もうとせず、空を彷徨いながら、雨季がもたらす「雨粒」だけを待ち望んでいます。何か特別なものを望むこと、それは実に苦を味わうことなのです。〔九・一二〕

もし一つの感覚の対象に足を踏み入れた(のめり込んだ)場合でも、人はその重たさに苦しむでしょう。どんなに力があっても、「その」大変な重荷はひとりの人が背負いきれるものではありません。そんな有様であるのに、なぜ人はすべての種類の感覚の対象の中へ、抵抗できない力で、幾度となく自身を委ねてしまうのでしょうか。天界へ達するまでの道において、ずっと自分につきまとい続けるであろう、途方もない苦しみをよく知っているのに。」(九・一三)

◇ 王は言いました。「偉大な婆羅門よ、こうしてご自身の苦しみを繰り返してお語りになられたのは、なぜなのでしょう。どうかすみやかにその求めるものをおっしゃって下さい。」—— 婆羅門は答えました。

「インドラ神は乞われなくても、「わずかな水を乞う者」(チャータカ島)に莫大な清らかな雨水を与えます。そうであっても、しかし乞う者は自性が臆病なので、その者は不安げに繰り返し乞うのです。(九・一四)
私はわずかなことを願っているのですが、それでも私の心は、未だ成就が見通せないため、苦悩しております。それ故：閣下、私に握り飯を一つお与え下さい。」(九・一五)

◇ その時菩薩はこう考えました。「ああ、多くを欲していることが〔私自身の〕すべての苦の原因なのだ。わずかしかな願わない者にとっても、人に援助に求めるといふ思ひは、疲れるものだ。まして多くを欲している場合、その者の心はさらに多くの疲労を絶え間なくかかえるに至る。山を登る時、荷物無しでも、人は苦勞するが、まして、肩に背負った沢山の重荷のために前屈みになっている者は言うまでもない。」(九・一六)

◇ かの王はそう考えてから、毎日、彼がもつ自分の二口分の飯のうちの一口分をその婆羅門に与えました。その一口分のみの食事によっても、彼は以前どおりに喜びの心をもつて日々を過ごしました。その後、大臣たちは驚きをもつて、かの王に次のように語りました。「ああ何と、一口分のみをお食べになつていても、王様のお体の力と美しさは少しも失われておりません。」—— 王は答えました。「この場合、〔私ではなく〕『自足』(知足)が称賛される

べきなのです。あなた方は次の点を見てとるべきです。

『自足』と『不満足』とが、それぞれ『楽』（満足感）と『苦』とを作り出すものであることを知った後、私たちはその『楽』を欲しますが、しかし『不満足』をまだ捨てていないのです。(九・一七)

また、『楽』を求める『渴愛』は、情欲などを発生させるものです。それも捨てない限り、『苦』という登り階段の連続を、誰が終わらせることができるでしょうか。(九・一八)

鉄も、鉄で打たれば、壊れます。強い支柱も、象王によって破壊されます。しかし幾度も振り下ろされる『運命』の斧の刃をもつてしても、この『渴愛』という蔓を断ち切ることがどうして可能でしょうか。(九・一九)

『自足』という護呪によって、『感官の対象』という毒蛇からの危険をなくせば、心の状態は護られて、『楽』は保たれます。しかし、『運命』という象が〔将来の〕『願望』という果樹たちを、まだ果実を生じないうちに壊してしまった時には、心堅固な賢者であってもやはり落胆するものです。(九・二〇)

人に仕えようとすることは惨めであるので、決してしきりに頭を下げたり、卑屈に請願することをしないこと。また、財産に驕りをもつ人たちの前で「主人よ、お命じ下さい」と言ったりしないこと。また、『嫉妬』という毒気の焰を発する毒蛇である悪人たちの仲間に入ったたりしないこと。(そうして) たった独り『自足』を得て、

『この世に生を受けたこと』を幸せに甲斐あるものにするのです。(九・二二)

◇ かくして、完全な幸せを望むなら、『自足』に熟達すべきなのです。― 「そう王が説くと」大臣たちは「ああ、見事にお語りになられました」と菩薩の言葉を悦び讃えて、そしてそれぞれ自分の家へと帰ってゆきました。

さてその時神々の王（インドラ）は、利他行を喜びとするというその困難な事をかの王がなすのを観察して、次のように考えました。「ああ、何と驚くべきことだ、このブラフマダッタ王が自身の体の苦しみを一顧だにせず、毎日このように生類のために益をなしているとは。では今、彼の決意のほどを試すことにしよう。」― 彼はその王が食

事をしている時、婆羅門の姿に変身し、葉で作った鉢を手に持って、その面前に立って言いました。

『「熱望」』という毒がもつ作用でひどく心を乱した、乞い求める人々は、自分がかかえる苦痛を必ずはっきりと表現しなければなりません。母親すら、赤ん坊が喉が渴いて乳を欲しがっていても、泣き出さなければ、乳房を与えないのですから。(九・三三)

飢餓に体がやつれ、長い旅路に起きた疼痛をかかえ、食を乞い歩いていますこの私にどうか、王様、なにがしかの食物をお与え下さい。(九・三三)

◇ その時、自身がもつ善い心性の故に「その依頼に」甚だ大きな歓喜心を得た菩薩は、彼が唯一もつその一口の飯を、最大の満足をもって婆羅門の姿をした神々の王に与えました。

すると神々の王は、(a) 清澄な様々な冠の宝石の光から生じた虹の円環に全身が包まれている、(b) 膝まで垂れた真珠の胸飾りに飾られた、(c) 頸のまわりに数珠つなぎに紐を通した芳しいマンダラー花^⑤の花環と近くを飛び回る蜜蜂の群をもつ、自分の本当の姿を現し出すと、幾たびも次のように菩薩を讃えました。

「ふつう人々が布施を与えるのは、それが自分にとって差し障りがない時のみです。あなた以外に誰も、自分自身の苦しみを考えずにこのような布施をする者はおりません。(九・三四)

(a) 愛語をなし、(b) 善き人々が進む道に奉仕し、(c) 他を益するために常に努力している、(d) まるで「乞う者にとつて」実現が約束されている『希望』そのもののような、あなたのような人々が、施を乞いに来るとんな者をも満足させないことがありますか。(九・三五)

施を乞いに来た者を、まるで大好きな親戚であるかのように、はつきり嬉しげに目で見つめる人。また、配慮をもつたとえ僅かであつても時を逸することなく親切に施す人。また、施すことによつて乞う者が得た快よりも遥かに大きな快を感じる人。—— そのような者を、賢者たちは、「施行をなす他の者たちを遥かに凌駕す

る施与者」なり、と説きました。(九・二六)

◇ 申し分のないかたちでこの大地(女性名詞)は夫(庇護者、王)をもっています。その庇護者とはあなたです。ですから、さあ田畑の地にあらゆる種を蒔きなさい。私は今日からずっと雨を降らせましょう。* と言うと⁽⁹⁾、彼は姿を消しました。

* その後、稲の籾すべての種蒔きがあった時に、神々の王(インドラ)の力によって震わされた稲妻たちがとり巻いた腹部をもつ「雲」、まるで全身を黄金の装飾品によって飾られている象の姿に似た⁽¹⁰⁾、すっかり水に膨らんだ大きな姿をもつ雨雲が、空いちめん垂れ込め、「苦しそうに」浅い呼吸で首を振り動かしていた孔雀たちが涼しい柔らかな風に触られて、上を見上げ、鳴き声を発しました。雨が発せられる時に満足する、確たる心をもつ彼らは、まるで雷鳴の様に、すべての方角に声を発していました。

* 花開いたカタンバ樹とアルジュナ樹の香りを伴った冷涼な風によって、「太陽の熱苦に」苦しめられていた蛇たちが息を吹き返し、まるで療治を「離れる」如く、梅檀を離れてゆきました⁽¹¹⁾。(九・二七)

* 黄金のように明るい黄色をしたマンゴーの果実を放り捨て、「樹に」入っては外に出たりしている力強い鸚鵡は、ジャンプ樹(フトモモ)の果実を手に入れて、鮮やかな色をした舌を示し、完熟したそれを、その樹の葉の形に似た長い嘴でばらばらにしました⁽¹²⁾。(九・二八)

* 草の若葉が消えてから「ずっと」裸になっていた大地(女性名詞)は、長い雨季のおかげで出現した「豊かな若葉」を有し、まるで幸せな女が夫の懐の中にいる時のように、歓喜のあまり「草という」体毛を逆立てているかのように見えました。(九・二九)

* 農夫たちは「大雨によって」川に流れ込む水が土手を打つのを、また生じた稲や「花を」閉じたままの睡蓮によって田地がいちめん覆われたのをようやく久々に眺めて、歓喜しました。(九・三〇)

* 新緑の草の若葉が至る所で〔牛たちに食べ〕尽くされる頃、牝牛たちはとても肉が増え、皮が盛り上がってきました。毎日〔出す〕乳が増えてゆく牛の乳房は重たくなってきました。(九・三二)

◇ * やがて次第に、か細い白雲のかけらに覆われた空、また白いカーシャ草の花という衣をつけた多くの川に覆われた大地と⁽¹⁾、満開の蓮や睡蓮に飾られた池を有する〔季節〕として、秋が訪れた時、夜空はまるで藍で染められた家の壁のように青暗くて、雲の衣から脱していました。

* 人々の目にとつての祝祭である月〔男性名詞〕がいるので、『夜』の女神はまるで羞恥を懐いた娘のように〔彼を〕見てはにかむかのようでした。

* 風が吹いて、満開に咲いた青い睡蓮の花粉を奪って去り、その風に靡かされて〔穂先が〕少し傾いている、よい香りがする薄い網状の〔穂の〕広がりをもつ稲は、すっかり熟してどれも黄色に変わりました。(九・三三)

* 『秋』という女は、托鉢者として疲れた『蜜蜂』という比丘に、新鮮で黄金粉にひとしい光輝をもつ蜜で濡れ湿っている睡蓮や蓮〔の夢〕という器の中にある、輝く花の汁の雫〔という施食〕を与えました。(九・三四)

* 夜毎に闇は薄れてゆき、明るさを増し、月は真つ白な宝石の破片の如き浄らかさに達したかのようでした。無音の水がつくるさざ波はごくわずかで澄んでおり、川たちは光り輝く魚の群をもつに至りました。(九・三五)

* 空の東西の中間の空間に浮かんだ虹は、少しぼやけて、真ん中が途切れてしまいました。至る所で発生しては落ちていた稲妻は消えました。また雲たちの群は風によって吹き散じてしまいました。(九・三五)

* まるでプリンガ蜜蜂のように青黒い色をした広大な闇を明るくしようと欲しているかのような、かの〔金色の〕ガルーダ鳥に似た、また〔丸い〕象の額の隆起にも似た、夜の『月』という水壺から、夜咲きの白睡蓮たちは与えられる『月光』という水を飲み、さらにもっと飲もうと欲していました。(九・三六)

◇ * その後、飢饉の苦しみの生活をきりぬけて、幸せの中に過ごしていたかの民衆は、大臣たちに囲まれている

王のもとにやって来て、謁見の時に、敬意を表してこう言いました。

* 「とても偉大なる、栄光ある王様、あなた様の福德の力により、民の苦しみは取り除かれ、豊作が再び現れ来ました。」〔九・三七〕

* ああ、大地の祝祭（歓喜）となったお方よ。あらゆる生き物に憐れみをもたれるお方よ。この大地は、王様、主であるあなた様という庇護者を有しております。〔九・三八〕

* 海は宝石の集積の眩しい輝きをもちます。月は淨らかな光線をもちます。大枝を有する樹々は豊かな果実をもちます。そして王様、あなた様は他者を益するための、富と繁栄をおもちになっています。〔九・三九〕

* 大波ある海の水は塩辛さをもつものであり、また月にも汚い斑点があります。しかしああ、あなた様のようなめでたい生まれをもつ方々は、お心にどんな欠点の穢れをもちません。〔九・四〇〕

* 広大な知性をもち、愚痴の闇を滅する方、あなた様が苦海の水から救護する者としてもしお誕生にならなければ、「苦海に」満ちあふれているこの生類はみな滅んでしまうであります。」「— そう、語りました。」

〔九・四一〕

◇ — * さあ、このように、かの世尊（釈尊）は菩薩であった時に、自身の苦しみを顧みずに人々を助けられたのです。そのことを考えて、越えるのが困難なこの輪廻の海を越えたいと欲する者は、最も困難な時においても一意専心して布施行に止住しなさい。

『ブラフマダッタ「王」ジャータカ』、第九話「終わる」。

第二一話 ダルダラ蛇ジャータカ¹⁵

* 自己の怒りを制御できる者は、卑しい者たちのなす振舞が日々「自分たちを」貶めるものであったとしても、自制心をそなえた不動の態度によって、他の人々の行動にも徳化を及ぼすのです。(三二・二)

◇ 次のように伝え聞いています。―― (a) 無垢の鏡面のように清らかな水面を或る所で水棲の鳥たちの羽が打ち叩いたため蓮の群が「かすかな波に」揺さぶられている「湖」、(b) 欲望を離れた心をもつ苦行者たちがよく訪れ来る沐浴場のある、(c) 柔らかな風によって絶えず壊されたり、繰り返す波によって動かされたりしながら、その岸辺の線が花環のような白い泡と混ざり合って不明瞭になっている、また (d) 岸辺の樹々の花が「水面に出た」多数の丸い石の上に散り落ちていて、(e) 善き人々のなす行いのようにあらゆる生き物を幸せに導いている偉大な蛇の住処である、大きな湖に、無垢の諸宝石がある幾つものフード（コブラなどの蛇がもつ頭巾）によって飾られている、ダルダラという名の「蛇」として、菩薩（釈尊の前世）が出生しました。

* この方は蛇として生まれながらも、我慢強い寛容さ（忍辱）への希求を失わず、水に濡れた樹木が火に焼けないように、決して怒りの心に焼かれることはありませんでした。(三二・二)

* 絶えず慈心を修習する賢者たちの心にとって、敵に対しても友人に対しても無差別に憐れみを起こすのは、ごく自然なことなのです。(三二・三)

◇ * この偉大な心の方（菩薩）は、法と合致した行いをしている比丘や苦行者を見ると、人間の姿に身を変え、螺髻（婆羅門の髪型）をつけた姿で、表敬訪問するのです¹⁶。

* またこの偉大な心の方には、「蛇の」フードの諸宝石と身体の皮膚がよく似ている、ウバダルダラという弟がいました。その両者はお互いに相手に役立つことに専ら心を向け、「蛇の」仇敵を害する苦を避けて、まるで苦行者の

ようにその湖で暮らしていました。しかしその「湖」においても（他の）蛇たちは、自性から善良な心をもつ菩薩が近隣にずっと住み続けていることに、我慢のならない思いを持っていました。無害であるにもかかわらず、彼らはあれこれの嫌な言葉をもって毎日この「菩薩」を傷つけていました。

* すべてての事は「それぞれの」本性に因るのですが、――

* 汚れた心をもつ者たちは、悪趣（悪い世界）の故に、暗愚者という自性をもっており、まさにその「愚かさ」故に、彼らは寂靜の心をもつ者たちに対してさえ、根柢なく卑しい行動をとるのです。（二二・四）

◇ * その後ウパダルダラは、蛇の群の近くで受けるその軽侮に耐えられず、驕りに占められた心をもつ彼らのことが少しももう我慢出来なくなつて、ダラダラに言いました。「私たちはどうして、これらの卑しい自性をもつ蛇たちによるこの侮辱を、もう不可能なほどに我慢しているのでしょうか。他のいくつかの湖を支配している蛇の王たちは力ある友人ですので、彼らに応援を頼んで、戦闘をもつて、あの蛇たちをこの湖から放逐するか、滅ぼしてやたらいかげんでしょうか。」

* 菩薩は答えました。「立派な顔立ちの者よ。不善の者たちと関わつて生じたその怒りを、自己制御の力によつて全く放棄しなさい。お前は次の点を見てとるべきです。

* たとえ『忍辱』という鉄の鉤棒をもつて、長い間『怒り』という象（の暴走）を止めてきた者であっても、とどまつていた正道を踏み越えてしまつて、その心が決して後悔することがないならば、次世でも、悪趣（悪い世界）を得ることになります。（二二・五）

* 道ならざる道を行き、慚愧を知らず、知者たちが諫める言葉に耳を貸さうとしない不善の人々をしつこく熱心に非難する人は、善人であっても、たちまち、その善性を捨てることになります。（二二・六）

* 『棘のある道に足を踏み入れた者は、皆、入り込んだその事から起こつてくる苦しみを得ることになった』と、

そう考えて、幸せを得ようとする賢者は、恐ろしい棘のある(敵のいる)悪趣にすることを捨てます。〔二一・七〕

* 火の粉をあげる怒りの焰が心を燃やし、ますます「その焰を」増してゆく状態であるなら⁽¹⁾、その生き物は、「忍辱」の水に浸され浄められた、幸せを「自分に」与えてくれる者をこそ、すぐ殺してしまうことでしょう。

〔二一・八〕

* このように「見て」、侵入してくる敵や現れ出る病気に似た、忍辱の仇敵たるもの(怒り)を、忍辱をもって打ち負かして、心を寂静へと向かわせなさい。〔二一・九〕

◇ * また、月の光線の如くに清浄な水を有する湖が他にいくつもあり、どうして「移動が」出来ない者であるかのように、この湖に住まなければならないことがあるでしょうか。ですから、さあ来なさい、他の湖に住むことにします。」

* 「兄上の仰せに従います」と「弟が」答えたので、菩薩は弟に随行されて、(a)まるで液状化した水晶の集まりのような「水の」、(b)群生する蓮にいちめん覆われ、(c)水中を進みゆく光り輝く魚の群に満ち溢れた、(d)岸辺の水面に近くの樹々の影が覆い被さっている、(e)すきま無くあらゆる所に夥しい水鳥たちがいる、大きな湖にやって来ました。

* その後、彼が地下世界(蛇族の住地)に深く潜り込もうと欲した時、堅固に寂静を失うことのない心をもつ彼のために、湖の波たちはまるで生き物のように、贈物として、多くの蓮の葉が混じった泡を与えました。〔二一・

一〇〕

* 「わが水は浄らかなものとなりますように」と、其処でそのように「願いが」語られた時、蓮の群生を有する「湖水」は、「水面に映った」蜜蜂たちのいる樹という眉を強く動かししました。〔二一・一一〕

* その「湖水の」請いに応じて、「蛇のフードの」宝石の輝きをもつ彼ら二匹が、その「水の」中に没した時、

虹（宝石の光）と湖水の間に一瞬、間が無くなった（入り混じった）状態となりました。（三二・二二）

* それら二匹の気高い〔蛇〕たちが地下に住むことで、パドマ紅蓮とウツパラ青蓮の花が咲き誇るその湖は、淨らかな自性を有するものとなったかのようには思えました。（三二・二三）

◇ * その後、大きな蓮の群を有するその湖水を棲み処とする、自性が凶暴で、汚れた心をもつ一匹の大蛇が、かれら二匹の生まれながらの性質から出ている善良性を知ると、毎日、次のように『侮蔑』という毒をそなえた熱く焼く言葉を（彼らに向かつて）吐いたのでした。

* 「蛇性をもち、〔その本性に〕根差しているお前たちにとって、忍辱を有することが何になろうか。たとえ深い水を湛える海に住んでいたとしても、『水の雌馬の口』の火（深海中で燃えている地獄の火）⁽¹⁸⁾が決して冷たくなったりしないのと同じだ。（三二・二四）

* 充ちた怒りの火があるくせに、忍辱を説法すること、それ自体が笑止だ。ああ、お前たちの大きな偽善はまったく私や生き物たちを騙すものだ。（三二・二五）

* 怒りを隠して「私は忍辱の性質をもつ」と言いながら、〔陰で〕生き物を片付けている、黒羚羊の皮と木葉の衣を着たこのヤクシヤ（夜叉）は、世を欺き、「殺生の」誓いをもつ苦行者と称する。（三二・二六）

* 怒りの火があつて、生類の苦の原因となつてお前たち二匹の忍辱を、生き物たちは「誰も」信じておらぬ⁽¹⁹⁾。お前たちの、この馬鹿げた『正法に適った自己』のあり方』とやらは、私にとってはお笑い草だ。（三二・二七）

◇ * だから、われらのこの湖の住まいから、さつさと出てゆけ」と、そう言いました。この水蛇がこのような根拠のない言葉を荒々しく語つたのを見て、生まれつき（自性から）清らかな知性をもつダルダラは、自らの心にこう語りかけました。

* 『善き者の心』という女主人は、「自身は」恥じなくても、不善の者たちを、慎みの態度すら失っているゆえに「服も着ていない」裸者であるかのように眺めて、赤面し続ける、こう思いながら―善き者たちの言葉に「接して」、言葉の戦斧により破壊されつつ、激しい興奮をもつ者たちは、善き者たちの「内面の」侍者たる諸々の『徳性』を目の前にすると、遠くから眺め、まるで恐怖をもつかのようだ、と。」(二二・一八)

◇ * その時、その大蛇のもつ『悪人たる性』という弓から射られた『荒々しい言葉』の矢を耐え忍ぶことが出来ずに、怒りにひどく心をかき乱されたウパダルガラは、齒の先で下唇を噛みながら、ダルガラに言いました。「兄者、この大蛇のこんな軽侮をどうして堪え忍ばねばならないのでしょうか。どうしてこの者は根拠もないのに、毎日私たちをこのように侮辱するのでしょうか。この湖はこの者が買ったその私物ではないでしょう。ですから、もう多くを語る必要はないでしょう。」

* そもそも、「私たちが」欺瞞を有するというこの「話」は、瞬時のみ「言いうる」言葉です。正法と結びついた道を失っている者は、根拠なく「私たちを」敵とみなすのです。「私の」稲妻の如き広大な黄色い毒の火によって、至る所に大勢いる大蛇たちの群を調伏させてください。」(二二・一九)

◇ * 菩薩は答えました。「苦しみをもつあの者に関して、その心を責めることはやめなさい、もう沢山です。これは耐え忍ぶことだけがよいことです。それは何故かという」と、

* 『強者にも弱者にも耐え忍び、罪深い者にも「耐え忍びを」なす者、そのような者が真の忍辱をもつ者である。』―このように善き者たちは世の人々に説いています。(二二・二〇)

* 無駄に怒りの火をかきたてる者、荒々しい言葉を語る者は、恩恵に対してわずかな感謝も知らないため、悪趣「に居る」より他はないのです。(二二・二二)

* それ故、根拠なく荒々しい言葉を語るあの「大蛇」は、不名誉な過失に打ち負かされた、迷愚の知性をもつ

不善なる有情となっています。(二二・三三)

* 悪人は、自分を責めつつ無意味な罪を重ねます。ですから、彼に対して憐愍こそが、賢者によってなされるにふさわしいのです。(二二・三三)

* ですから、このような〔寛容の〕精神を実行しなさい。この者は他者を傷つけるためやたらとその〔侮辱〕をしたがり、慎みの態度がなく、〔言葉の〕戦斧によって自身を毀損した者ですが、立派な学識をもつ者たちは彼を憐れむのがよいのです。](二二・三四)

◇ その時ウパダルダラは恭しくお辞儀して、菩薩に対し「偉大な教誡者たちの言葉に背くべきではありませんね」と語って、自らの怒りの火を『忍辱』という聖水をかけることで鎮めました。

* 善き再生によって高い位に就いた者、三界が無節操になることを阻止し、美徳を堅くそなえ、心に羞恥を有する者は、生き物たちを福利のために守護すべきなのです。(二二・三五)

◇ * かの大蛇は、十分に習熟した忍耐に基づく自己制御の言葉として菩薩が説いたことを聞いて、後悔を覚え、「無根拠に憎悪をもち続けた私が、毎日のように荒々しい言葉を言い続けてきたのに、この偉大な方は〔私に〕少しも険悪さを心にもたないのだ」と(「気づき」、それ故「おお何という大きな驚異か」と考えて、彼はグル(精神の師)に等しいと見なすべき菩薩の許に近づくと、堪忍を請いながら、様々な言葉を次のように語りました。

* 「幾度も私によってあのような侮辱をされましたのに、あなた様のお心が変わることはございませんでした。あなた様はきつと、蛇たちの心を躰けるために、大聖者が蛇たる姿をお取りになられたのでしょうか。(二二・三六)

* 「あなた様もつ」恐怖を生じさせる蛇たる姿と、全く安らかに鎮まったお心とは、甚だ大きな開きがあります。〔蛇族の敵である〕鳥の王(ガルダ)すら、きつと態度を変え、憎悪を捨てて、あなた様を崇めるでしょう。』

◇ *かくして、「それ以来」その大蛇は粗暴な言葉を使うことをやめ、菩薩の慎み深い生活態度にならうことで、自分の住処に戻ってから善き自性をずっと保ちました。

— *さあ、このように、かの世尊（釈尊）は菩薩行に住して、蛇という生まれにあっても、忍辱に慣れ親しむが故に、暴悪なる心をもつ者たちをも善性に導いたのです。そのことをよく考えて、忍辱に習熟しなさい。

『ダルダラ・ジャータカ』、『第二部類の』第一話〔終わる〕。

第二九話 劇団の娘ニルパマー・ジャータカ²⁰⁾

『教えの詩』(善説 *suddhanta*) は、『五感覚の快樂』という仇敵により『罪』という地底世界(地獄)に投げ落とされていている人たちを、親友のように力強く、とても恐ろしい〔結果〕から守ってくれるものです。(二九・二)

◇ このように伝え聞いています。— ある立派な都市において、まるでバラタ(インド古典演劇論を創った聖者)の姓の系譜を飾らんと欲したかのように、舞踏劇(ナーティヤ)の技芸に巧みな或る一人の役者の妻の胎中に、菩薩(釈尊の前世)は生まれました。

時が経ち、まるで夜(という女)から月齢一の新月(カラー)が生まれ出るように、その役者の美しい妻から〔菩薩は〕誕生しました。心を奪う美しい肢体をもつ〔その子〕はまるで舞踏劇の技芸(カラー)が娘の姿をとって肉体を具えて生まれたかのようにでした。(二九・二)

その華奢な体は蓮の花粉のように雅やかな気品があり、また容においては満月の美をも凌駕していましたので、その娘がもつ格別に美しい容姿を眺めて、父は大喜びし、ニルパマー(比類なき美)と名付けました。(二九・三)

◇〔誕生後〕二年が経った時、ニルパマーの父母は他世に逝きました。役者であったその父は、すべての役者を率

いる〔劇団の〕長たる、或る師匠と親友でした。その〔師匠〕はやって来ると、ニルパマーの親族たちに言いました。「もう悲しむのはやめよう。あの親しい友が天界に至ったからには、私がこのニルパマーの父になろう。もしあなた方の承諾が得られるなら、私はこの子を舞踏劇の技芸の名手にするつもりだ。」―「そうして下さい」と親族たちが同意したので、その師匠はニルパマーを引き取って、長くかかることなく、台詞を巧みに語ることが出来る、種々の舞踏劇の技芸に達者な娘に育て上げました。

◇ 「立派な心の持ち主であるその最高の師匠によって、私は正しく自分の役目を授けられた」と、あたかも『舞踏劇の技芸』そのものがそう思い、稽古熱心な彼女を毎日しっかりと内に抱きしめているかのようでした。(二九・四)

◇ その舞の師匠は、彼女をあらゆる舞踏劇のしぐさにおいて完璧な形を示しうる者に育ててから、彼女を「自己」最も優秀な息子に嫁がせました。

ある時、王がかの都城でその師匠を呼び出して、こう言いました。

「人がもしあなたのあらゆる詠唱や舞踏劇を聴き観ることが出来たならば、その人の耳と眼はこの世に生じた甲斐があったというものだ。私はそう思う。(二九・五)

そこで、座頭よ、舞の名人たるあなたが演劇を舞うのを、この宮殿で私は後宮の者たちと一緒に観たいのだ。」

(二九・六)

◇ 師匠は答えました。

「国王であるあなた様のようなお方に観られていますと、舞を演ずる者の心は最も激しく高揚いたします。「あたかも」太陽が昇る時の心地よい眺めの中で、蓮が花蕊を上に向かって伸び開いてゆくように。(二九・七)

ああ、「その時」ラサ(美的陶醉としての種々の情緒)の明瞭さによって、バーヴァ(種々の感情)の明白な区別が現れ出ます。詠唱はラサの力に従いつつ、声の抑揚を何度もあれこれと変化させてゆきます。「舞台上の」立ち

◇ 回りは、美しい歩の運びによって典雅です。観客は声かけをし、そうして役者を導き、励まします。(二九・八)
 閣下はかくも目利きの観客であります。ですから閣下が私に舞踏を演じるのを観たいと希望されれば、お引き受けいたします。」— 王は言いました。「では、あまり〔準備に〕時をかけずにお願ひしたい。さっそく伴奏団の手配を始めなさい。」「かしこまりました」と師匠は返事をし、眺めて快いように劇場の設営をなし終えた時、その偉大な王が後宮の者たち・大臣たち・都民の群を伴って着席し、ムラジャ鼓の音が王宮いっぱい響き渡ると、まづ座頭によってナーンディー(祝祷)が唱えられ、いよいよ舞踏劇が演じ始まって、舞台上にその師匠がニルパマーを伴って登場しました。

魅惑のしぐさが美しい、顔が笑みに輝くかの『舞の踊り手』は、高鳴り続ける『ムラジャ鼓』の雨雲の大音響を伴いつつ、眼を悦ばせるその『舞踏劇』という雨季を、「光り輝く」稲妻の如くに、隅々まで美しく飾りました。(二九・九)

そして、完璧な美をもつかの『師匠』という春の季節を得た時、一輪の『蓮』の如きそのニルパマーは、愛らしい微笑によって、『蓮の花』の口中にある『花糸』の歯列の燦めきを、ほんの少し、鮮やかにきらりと示しました。(二九・一〇)

魅力があり、舞えばその時さらに美しくなる肢体をもつ彼女は、どの情感(ラサ)も楽々と表現してみせました。かの全観衆は「ううむ、なんとも見事、見事」と唸りながら彼女を見つめて、興奮のあまり彼女と一心同体になったかのようにでした。(二九・一一)

〔演技の〕媚びが無い時でも、月のように愛らしい女の姿は、人々の心を興奮させます。まして「舞台上で示す」様々な芸の巧みさが、バーヴァ(感情)を伴って、羞恥ある婀娜っぽいしぐさ・甘い微笑・丸くつぼめた唇をそなえている場合は、なおさらのことです。(二九・一二)

◇ さて〔苦行林では〕或る一人の苦行者の息子が行をなすのに疲れ、心に嫌気がさして、次のように考えました。「ああ、自然から得たままの不味い木の根や果実の食事、〔仲間〕夥しく口論を吹っ掛けられることの堪えがたさ、黒羚羊の毛皮と木皮の衣のみの着用、硬い地面を寝床として得る体中の痛み、—こんな苦行林の暮らしはもう私はうんざりだ。もう出て行って、私は家住の生活をなそう。

(a) 心喜ぶ妻によって招き入れられた客人たちがいて、(b) アグニホートラの煙により〔あたりは〕浄められており、(c) 中庭で遊び戯れる仔牛がいる、そして (d) とても佳い香りのする花々が捧げられている神様のお堂があり、(e) 開いた新鮮なジャスマイン花のように真白い凝乳が混ぜられたバリ供養の食が〔地面に〕置かれて白黒まだらに見える地所が〔家の〕東にあつて、(f) 夜明けと夕べには牛飼いに搾乳されている牝牛の乳が〔桶に〕落ちる音がずっと聞こえてくる、(g) 毎日やってくる親友たちの集まりが心楽しい、家庭〔での生活〕に、学識ある家住婆羅門のいたい誰が心を悦ばせないことがあるうか。」

こう考えた後、その彼は〔とうとう〕かの都城にやって来たのでしたが、王宮からのムラジャ鼓の音を聞き、都民たちがそちらの方に向かつているのを眺めると、「私もまずは舞台でも観ようか」と思案し、王宮に入り、籐の椅子に腰掛けました。そしてなめらかな足の運び・身振り・眉を動かすしぐさの絶美なるニルパマーを観ると、次のように思いました。

「さあ愛の神よ、弓の弦を張るがよい、お前はなにをとまどっているのだ、馬鹿者、〔女が〕もちあげた眉をもつて催促しているではないか。ああ、このような、艶めかしい美によって魅する若い女の姿かたちだが、大きな快感をもたらさないような男が一体誰かいるだろうか。(二九・二三)

◇ こんな〔美しい〕女の姿が、一体どうして苦行林に住む者たちの目に入ることがあるうか、どうしてその歌の響きが耳に届くことがあるうか。私は苦行林に住むことをやめてよかった。」— 彼はそう考えながら目を凝らして

ニルパマーを見つめました。

その時、師匠にまっすぐ視線を向けた、白く輝く大きな目をもつ彼女のその二つの乳房から、黄金の蓮のつばみに形が似た、乳海の泡のように白い輝く「乳あての」ドゥクターラ布が突然、少しづり落ちました。(二九・二四) その時かの男優(師匠)は、両乳房を露わにしてしまった、細い腰の彼女「の姿」を凝視すると、少し笑いつつ「性的に」ひどく昂奮してしまい、愛神——いつも邪心をもって心の弱点を見つけようと専心している者

——の支配下に落ちてしまいました。(二九・二五)

〔往古の〕賢者たちや苦行者たちですら、美女の容姿を見ると、堅固な自制心を失ったものです。まして凡俗の人間がそれに抗うことが出来るのでしょうか。(二九・二六)

◇ ニルパマーはずり落ちた上の衣裳(胸の覆い)を引き上げてから、師匠が愛神の支配下に陥つたのを理解すると、迷妄の闇にいる人にとつての灯明となる『教えの詩』(善説)を、次のように説いて聞かせました。

「長い間ずつと心を正法から外すことなく保ってきたのに、もし欲望に穢れた行為をしてしまったなら、誰が地獄に赴かないでしょうか。夜々に〔道を〕照らしてくれたランプを捨ててしまったなら、必ず正しい道から外れて恐ろしい悪路に入ってしまうです。」(二九・二七)

◇ すると、まるで悪い道に入り込んだ弟子が教師によって善い道に引き戻されるように、その『教えの詩』のおかげで「心が」誤った状態から正しい状態に引き戻されたその師匠は、「じつに善い、じつに善い」と言つて、自分の上の衣裳を「脱いで」ニルパマーに与えました。

一方また「彼女の善説に」驚きの思いをもつたかの苦行者の子は、「ああ、見事に説いたぞ」と叫んで、ニルパマーの前に「彼の着ていた」黒羚羊の毛皮と樹皮の衣を投げました。

その場でまた、歓喜心を抱いた二人の商人が、「すばらしい、すばらしい」と何度もつぶやきながら、月のよう

に真つ白な二枚の衣を〔舞台に〕投げました。(二九・一八)

さらに同様に、驚嘆の心を抱いた大臣と王子の両者が、歓びのあまり若枝に似た指をくるくる回しながら、それぞれの衣を投げました。(二九・一九)

◇ さて舞踏劇を見終えた後、かの王は最初に、師匠に質問しました。「ぜひ教えてほしい。あなたはどのようにして自分の衣〔を与えること〕で、ニルパマーを飾ったのですか。」——師匠は答えました。「王様、お聞き下さい。

衣が落ちた彼女の姿の美しさを私が見た時、愛神は私の心から普段の平静を奪いました。(二九・二〇)

しかし彼女の丸い月の如き口から発せられた、はつきり明るく澄んだ月光たる言葉が、(a) 正法の道を阻む障害たる、(b) 情欲から成る、(c) 厚い雲の如き、〔私の〕大きな迷愚の闇を切り割ってくれたのです。(二九・二二)

そこで私は体から衣を取ると、清澄で確たる心をもつ彼女に投げ与えたのです。良識ある人のいったい誰が、迷愚の闇を打ち破るあの『教への詩』の威力を称えないでおかれましょうか。』(二九・二三)

◇ 次にかの王はその仙人の子を呼ぶと、尋ねました。「さあ、ぜひ教えてほしい。どうして君はニルパマーの前に、黒羚羊の毛皮と樹皮の衣を投げたのですか。」——苦行者は答えました。「大王様、お聞き下さい。これまで私は思案しておりました、『苦しいことの多い苦行者の出家生活をもう捨てて、家住生活を営むことにしよう』と。しかしあの女優の『教への詩』によって、叱られたように感じたのです。『どうしてお前はこれほど長い間、とてもなしたい苦行によって自分自身を淨めてきたのに、〔今さら〕まるで象の沐浴のように、無数の過悪の原因となる家住生活の中へずぶずぶと入ってゆこうと欲するののか』と。そこで私は再び苦行林に戻ろうと強く思いました。

そして敬信を抱いた私は、解脱の道を指し示してくれた偉大な美しい『教への詩』に礼拝しながら、彼女の前に、苦行に適した黒羚羊の毛皮と樹皮の衣を投げたのです。』(二九・二三)

◇ さて次に、かの王は二人の商人に尋ねました。「どうかあなた方は話して下さい。どうしてお二人はそれぞれ衣

を投げたのですか。」― その二人の商人の片方が答えました。「王様、お聞き下さい。異国に行こうと欲した或る一人の隊商主が、私の手に大変高価な真珠のネックレスを預けていったのです。ある時祭礼の日に、私の妻は頸を飾る装身具としてそれを用いました。すると、ここにおります私の親友の妻である人がそれを見まして、「これほどの凄いネックレス、あなたは一体どうしたの」と、そう私の妻に尋ねました。そこで妻は答えました。「或る隊商主が私の夫に預けていったものなの。これ〔の貸借〕ではあなたの夫が証人になっているわ。」「その隊商主が戻ってきた時、もし私の夫がそれを否認すれば、このネックレスは私たち二人の共通の所有物にできるわ。」― 妻たちから不正の道に立つその言葉を聞かされると、私たち二人も強欲によつて心を支配され、「そうすることにしよう」と同意したのでした。

しかしあの女優の、まるでかの牟尼（聖者）に由来するかのような、大きな闇を消散させる、あの『教えの詩』を聞いた時、私たち二人は善の道を滅ぼすその強欲を捨てて、再び善人の道の上に落ちついたのです。二九・二四

王様、そのようなわけで、地獄の火の燃料たる貪欲を捨て、淨らかな心を得た私とこの者とは、「すばらしい」と言葉を叫んで、その思いのままに衣をとつさに投げたのです。」二九・二五

◇ 次に、かの王はその大臣に尋ねました。「さあ、あなたもここで今話してくれませんか、なぜさつきあなたが衣を投げたのかを。」するとその大臣は地面に跪くと、答えました。「もし王様が私に無畏（素直に白状すれば罪に問わな）いと約束）をお与え下さるなら、私はお話しいたします。」そこで王は誓言をもつて、無畏を与えました。そこで大臣は、ほかの誰にも聞かれないうちに、その王に打ち明けました。「王様、お聞き下さい。私は邪悪にも、閣下の第一王妃と共にこのように決意していたのです。」

『毒をもつて、あるいは夜寝ている時に鋭い剣をもつて、この王を亡き者にし、その後われら二人でこの国土を

支配しよう』と。(二九・二六)

しかし、夜の月に似たあの女優からの皎々たる『教えの詩』の光を受け得た時、ただちに、悪しき妄想から生じて〔自身の〕徳性を滅ぼすものである、その〔心中の〕闇が私から消散したのです。(二九・二七)

正邪の道を教え示すことに見事な効果をもつ、あらゆる暗愚の闇を消散させる、あの『教えの詩』を礼拝しようとして、私はとっさにあの衣を投げたのでした。感官という敵の克服者(王様)よ。〔二九・二八〕

◇ さて次に、かの王は副王である長男に尋ねました。「命長き人よ(若き人よ)、さあ今お前は話してみなさい、なぜお前が衣を投げたのか。」— 副王は答えました。「父上、お聞きください。

「邪悪な大臣ともども、*王家から追ひ払うべき者である母上を殺さねば」と、私は最初、思案していました⁽²¹⁾。

(二九・二九)

* しかし傾聴に値するかの『教えの詩』をあつ勝れた女性から聞いたことで、その私の心は押しとどめられました。私は〔殺害が〕自分の福利を滅ぼしてしまうことを考えていなかったのです。(二九・三〇)

* そこで、無量の慈愛ある〔王〕よ、あの『教えの詩』を愛するあまり、あの確たる心をもつ女性が〔まだ舞台の〕途中であっても、「すばらしい」と叫んで、思わず私も衣を抛り投げたのです⁽²²⁾。(二九・三一)

* 悪道から人々を引き止め、心を安らかにする、『教えの詩』という不死の甘露を〔受け得た〕浄信ある心をもつ人ならば、一体誰が、こうして〔彼女を〕師の如くに尊重しないでいられますようか。〔二九・三二〕

◇ * その後、かの王は「すばらしかった」と言いながらニルパマーを呼び寄せると、財宝の適切な大布施をもつて敬意を示して、〔次の様に〕称讃を述べ始めました。

* 「きつとあなたは、どなたかの賢い偉大な牟尼(聖者)が、ヨーガの力をもつて女性の姿をとり、生類を安らかに静めるために〔世に〕来られたのです。(二九・三三)

* あなたの『教えの詩』という、「欲望に暴走する者の」悪い性質を矯める鉤棒のおかげで、²⁵⁾ (二九・三四)

* 或る者たちの「欲望の」マダに染まった『心』という象たちが、様々な『徳性』という山林の木々を破壊しながら、咎めるべき行為の道をいっさんに暴走してゆくのがくい止められたと、そう言えませんか。それ故、私のこの都城は「あなたという」救護者を有したのです。(二九・三五)

◇ * これ(都城)はあなたにより加持(超自然の力による加護)を受けたのです。——そう、誉め讃えると、王は「王宮の」奥へと戻ってゆきました。かの苦行者の息子も再び苦行林へと去ってゆきました。役者たちもニルパマーを伴って、王から敬意を示されたことを喜びながら、各自の家に戻りました。

— * さあ、このように、かの世尊(釈尊)は女性に生まれた時であつても、『教えの詩』という灯明をもって、生類のために善の道をお照らしになったのです。まして正等覚を得られてからのことは言うまでもありません。このことをよく考えて、仏陀・世尊に尊崇の思いを起こすべきです。

* (a) 暗愚の闇を打ち破る、(b) 善き人たち(の言行)と合致する、(c) 正法を逸脱しない道を照らす、『教えの詩』という月によって、心が確たるものになった人は、幸せを得るためにその眼をもう決して闇に塞がれてはなりません。²⁶⁾ (二九・三六)

『ニルパマー・ジャータカ』、『第三部類の』第九話「終わる」。

第三一話 隊商主スヤートラ・ジャータカ²⁶⁾

* わずかな快樂のゆえに妄分別し迷乱した心をもつ者たちの心をよく抑制するための、根拠(たる教え)を有する有徳の人たちは、「快樂への」愛著の焰を、執着を離れる法話という水によって消してあげます。²⁶⁾ (三二・二)

◇ 次の様に伝え聞いています。― 日常に必要な品々が〔どの家にも〕豊かにあることを悦ぶ都民たちがその目を楽しませる多種多様な公園林によつて郊外の地が満たされている、タクシヤシラー（タキシラ）という王都において、(a)多数の論書を絶えず学ぶことで清らかな知性を持ち、(b)悪人たちと関わることを嫌い、(c)善人たちとの交際を悦び、(d)慎ましい態度と思ひやりと忍辱〔という徳性〕に飾られた、(e)すべての人にまるで親族のように〔やさしく〕接する、スヤートラ⁽²⁷⁾という隊商主（貿易商）が、菩薩（釈尊の前世）として〔その地に〕出生しました。

*〔種々の〕技芸（カラー）をもち、〔暗愚の〕闇を打ち破る知性をもつ彼は、暗夜の様な日々を過ごす人々に、光のように幸せをもたらしました。まるで〔様々な〕月齢の姿（カラー）をもち、闇を打ち破る月が、夜毎に光をもつて人々に喜びをもたらすように。〔三二・二〕

*人々のために不益となるもの（害）を取り除くことにおいて彼は比類なく長けていました。どの集会場でも彼の知性は輝きを放っていました。多くの徳性が彼〔という存在〕を親友のように抱きしめているかのようでした。そして彼は異国からあらゆる成果を得て戻つて来るのでした。〔三二・三〕

◇ *さてある時、かの偉大な心の方（スヤートラ）はヴァーラーナシーにおいて、天女の容姿に等しいバドラーという名の最高格の遊女について耳にしました。彼女は美しく妖艶な姿という畏によつておびき寄せては多くの隊商長を虜にしてしまっていました。それ故、スヤートラはそのすばらしい美貌の高慢を斥けるために、また彼女と交わる者たちに慎みのある生活態度〔を得させる〕ために、多くの友人を連れてヴァーラーナシーにやつて来ました。

*スヤートラが来たことを聞いて悪い男たち（女衞など）は、その最高格の遊女にこのように語りました。

*「おお美しい方、あなたがおもちのこの天与の美の完全さは、クペーラ神の如き〔財産をもつ〕スヤートラを、今やついに引き寄せたのです。マンゴーの木の子に⁽²⁸⁾〔咲き出た〕花々の豊かさが蜜蜂を引き寄せるように。〔三

*そこで、あなたは快い薫香や塗香などを〔贈物として〕持たせて、教養豊かで言葉が巧みである一人の女使者をスヤートラのもとに派遣なさいませ。(三二・五)

*おお美の誉れをお持ちの方、あなたの女の魅力をもつて、あちらの守る領域の中に入り込み、彼の財宝を掴み取ってから、しかる後に彼をお捨てなさい。熟したマンゴーの果実を食べて、その種を吐きだすように。〔三

一・六

*このように言う、悪い男たち(女術)の言葉を聞いて笑いながら、富を欲するバドラーは、その堅実なる者(菩薩)に接近するため、言葉が巧みな女使者を送りました。(三二・七)

*心を奪う美しい花々を手にもち、キンマ(菴藷)の葉〔で下唇を赤く染め〕、月の光線の如く白い梅檀をつけた、まるで女ヤクシヤ(夜叉)のような〔妖麗な〕しぐさをもつ女使者は、世の人々のお芝居に躰いたことがないスヤートラのもとにゆっくりと近づきました⁽²⁹⁾。(三二・八)

◇ * 恭しい態度で、菩薩のもとにやって来ると、お辞儀して〔次のように〕語りました。「おお大きな幸をおもちの方、バドラーという最高級の遊女である娘が、まるで月の円弧が星々の美を奪って輝くように、他の最高級遊女たちの美を奪って輝いておりますが、その者から、ここに住んでおいでになるあなたに、このように伝言を申し上げます——『わが夫よ(聖子よ)、どうして自らの家をお捨てになられて、ほかにお住まいのですか。ああ、このことは実につらいことです。それ故、こちらに來られて、私どもに温情をお示しになって下さい』と。私どもの女主人(バドラー)は、美貌という徳性により世に知られた人ですが、大きな幸をおもちの方(あなた)に逢うことを切望して日々を過ごしているのです。きつとあなたには、そのことがお耳に達していかないでしょうね、他所で楽しまれているのですから。」——このように話された時、スヤートラは答えました。

* 「誰がいったい彼女のことを知らないでしょうか、愛神(カーマ)の道におけるあらゆる技芸の巧者として、ま

た美貌を有する〔かの神〕と等しい〔美の〕名声を有する者として。しべを生じた夜咲きの白睡蓮(クムダ)を開かせるのは、白く輝く三日月の到来によってであり、灯明〔の輝き〕によってではありません。(三二・九)

◇ * 私がヴァーラーナシーに来たのは他用ではなく、まさにそのために来たのです。——このように語ると、その女使者によって〔導かれて〕、(a)川の豊かな水のおかげで開花した如き川岸の木々が〔川の方へ〕頭を下げるように〔客に向かって頭を下げている〕女召使たちによって接客がなされている、(b)白い衣がある、(c)描かれた絵が〔客の〕目を楽しませる壁がある、(d)〔壁に〕付着した顔料の匂いが芳しく香っている、(e)新鮮なジャスミンの花環によって飾られた、(f)木綿布の上に線絵として描かれたマカラ(空想上の鯨と鰐に似た海獣)の旗が掲げられた、(g)沢山の翫間たちと一緒に高級遊女の母(おかみ)たちによって怒りをなだめられている客たちがいる、(h)とても多くの国々に住む人々から其処で〔財を〕ふんだくることが巧みな、(i)自己抑制が無いことと軽率の原因である、(j)ドラーの住まい(娼館)へと〔菩薩は〕入りました。

* かの最高級の遊女(バドラー)はウダヤを見ると立ち上がり、燦めく唇を動かし⁽³⁰⁾、うっとりさせる微笑を浮かべました。艶めかしいしぐさをしながら、眩しく光らせる横目で見た彼女は、彼の足先に手を置いて、お辞儀をしました。(三二・一〇)

* お辞儀をしてから、ぱつちり開いた眼をもつ彼女は、服の片方の布裾を艶めかしく弄びながら、また蓮華に似た薄桃色の足で微かに床を踏み鳴らしながら、次のように語りました。(三二・一一)

* 「あなたという」この月は、唐突に(予想外に)、どこから昇ってきてくれたのでしょうか。私はひどく心が暗い闇に覆われていて、夜の中に「光線を」欲していたのです——「あなたとの」出会いを欲する私〔の思い〕を鎮めるための、輝く言葉という月光を。(三二・一二)

* 今、私がつ女であることの利点が、私にわかりました。なぜなら、善に依拠するお方、果報が世界で衰滅

することがないお方、あなたが、最も優れた女の心を支配しながら⁽³⁾、私のこの住居をこれからずっと飾ってくれるからです。(三二・一三)

* 無垢の輝きをもつ月のように美しく、〔見ると女に〕恥じらいを生じさせる様なあなたを見ると、私の心の中に次のような考えが浮かびます——出会うことができずに孤独に彷徨っていた私の心を、かの愛神がきつと〔愛の〕矢で貫いたに違いない、と。(三二・一四)

◇ * その後、「遊郭の」幫間たちは、「この隊商長はまるで満月のようなお方」と〔言つて〕欲望を抱いたその最高級遊女に、次のように語りました。

* 「咲き出た美しい花々によって一本の樹が輝くように、また自ら光輝を発するもの(太陽・火)によって宝石の細い棒が輝くように、また月によって夜が輝くように、滞在しているあの美しい人(スヤートラ)によってあなたは光り輝いています。」(三二・一五)

◇ * その後スヤートラはその最高級の遊女とともに悦楽を味わい、夜が明けると、十万〔金〕の価値がある真珠のネックレスを与えました。二日目には、黄金の装飾品で〔彼女を〕飾りました。三日目に、銀製のつまらない装飾品を贈りました。そこでその最高級の遊女は憤怒に満ちてブラフマダッタ王にそのことを告げ、訴え出しました。

* 「私による接待は巧緻なものであり、しかも毎日〔その質を〕更に高めています。それなのに、それを気づかないかのような、スヤートラ様の愛に欠けた心は何故なのでしょうか。」(三二・一六)

◇ * そこでその王はスヤートラを召喚し、席を与えられた彼に対して、最高級の遊女に不正を働いたというその行為が語られて、「弁論が」始まりました。その最高格の遊女は申し上げました。「王様、心に愛情が欠けているこの人をいまさら非難したとて、何になるでしょう。」

* ああ、恥知らずな人。心が汚れていっばいのその人が、罪のない女に向かって、強く惹きつけるため、嬉し

◇ がらせを言つても無駄なことです。水のない場所に橋を架けるようなものです。」(三二・一七)

* 王は言いました。「偉大な隊商主よ、さあこの者に返事をするがよい。」——スヤートラは答えました。

* 「私たちは商品の鑑定に優れた頭を持っております、偉大な王よ。最高級の遊女というこの商品は、うつろいやすいという欠点をもっているのです。(三二・一八)

* 初めの日にあつたようなこの人の美しい状態を、第二の日に私はその身体に見ませんでした。この人において容姿の変化(美の劣化)があつたのを見て、「贈る」装飾品を私は変えたのです。(三二・一九)

* 黄金は、未精錬であるうちは、火によつて熱せられると、だんだん火中に入れられたものに不純物が出てきます(註)。(三二・二〇)

* 感覚の領域(視覚・触覚など)に赴くと、その時に人はとても心に適う享樂を得ます。しかし既に行った(手に入れた)享樂へ赴く時、人にとつて「そこで得られるものは」たちまち、まるで萎れた花のように、「以前の」半分だけの残りとなつてしまふのです。(三二・二二)

* 蜜蜂は咲いた花の中にもぐりこんだ後、何か汚いものが付着していたので、「手に入れた」その蜜を、急に捨ててしまいます。ふつう「生き物たちは」新鮮なものだけを愛好するので、とても心に適うものは、この世にはごくわずかしが存在しないのです。(三二・二三)

* 老いはきれいな容姿を、見苦しいものにし、奪い取ります。「美への」様々な強い愛著の力も、心を傷つけるだけです。「生き物の」寿命は、ヤマ(閻魔、命の終わりをもたらす者)がかくも突然にその支配を示します。物事は総てあつという間なのです、王権のように、食べ物のように、光のように。(三二・二四)

* かくして、老い・病・死・転生の苦しみの矢に打たれ続けることで、心の堅固さは弱まってゆきます。女という骨の家(肉体)は、自性が不浄なものです。「それを」見るなら、いかなる美質を見て愚かにも「女に」愛

着を起こすでしようか。(三二・二四)

* 「おおなんと、女は美しい姿をもつことか」と、愚かな人は惑乱されます。しかし賢者たちは「この者(女)は骨の連なりである」と(彼らを)叱ります。(三二・二五)

* 女たちは愛おしいが、そのように過患あることが知られた故に、賢者たちは(女たちを)遠くに避けるのです。犬(「の尿」)に汚されたジャスミンの樹を人が避けるように(三三)。(三二・二六)

◇ その時、かの王は「ああ、見事な言葉でした」と言つて、菩薩を繰り返し称讃しました。その最高級の遊女も、若さと美貌による高慢から離れることで、全き寂靜への心集中(二境性)が生じました。その他の多くの人も、放逸を遠ざけつつ、戒律行をなす原因となる(正しい)自己のあり方に入ることを得ました。

— * さあ、このように、かの世尊は、かつて凡夫(世俗の一般人)として暮らしていた時でも、愛の欲望を離れることで、愛著の火を避け、寂靜に満ちた状態で過ごされたのです。そのことを思い、世尊に対して最高の淨信を捧げるべきです。

* 『隊商主スヤートラ・ジャータカ』、〔第四部類の〕第一話〔終わる〕。

第三三話 シャクラ(帝釈天)・ジャータカ⁽³⁴⁾

最も高い地位であり驕慢さを得やすいインドラ(神々の王)の位に(輪廻して)達した時でも、すぐれた者たちは憐れみのために心が清らかであり、利他の努力を決してやめることはありません。(三三・二)

◇ 次の様に伝え聞いています。— (a) 三界の益を増やそうと休みなく活動しているため、旅路にいる夫の帰りを待つ妻のように『悟り』(女性名詞)によつてずつと待たれている者であり、(b) いとしい息子への愛情に心を濡らす

母が異国から故郷に戻ってきた〔わが子〕を強く抱擁するように『憐れみ』という母がその心を強く抱擁している者である、菩薩（釈尊の前世）は、(c) うつくしい美と繁栄の女神（シユリー）によって深い敬意をこめて抱きしめられた者、(d)〔彼の〕足下に跪いた〔神々の群〕の髻の宝珠^⑤の輝きによって蓮のような両足が照らされている者である、三十三天の王（インドラ神）に、善根の蓄積によって或る時生まれました。

神々の集会場は、光の輝きに包まれて示現した姿の彼（インドラ）によって美しく輝きました。あたかも、清らかな星たちによって空がまだら模様になっている夜が、淨らかな光をもつ月によって美しく輝くように。(三三・二)

大いなる剛勇があり高い矜持をもつダーナヴァ（阿修羅）たちも、彼の剛勇の力に対抗することが出来ませんでした。あたかも、すさまじい羽で打ち叩いて海を割って侵入してくるガルダ鳥の剛力に、龍たちが対抗するすべがないのと同じように。(三三・三)

繁栄のために三十三天を守護しつづける、かの偉大な心をもつ者（菩薩）を、美と繁栄の女神は〔自分の〕特別な居場所として愛し、彼のもとに敬意をもって留まり続けました。あたかも確固たる精神性をもつ者のもとに知性がずっと変わらず居続けるように。(三三・四)

アスラ（阿修羅）たちをも打ち負かす、神々の王というその位にあることは、我儘な驕慢さに陥る原因にもなりえましたが、彼は心を乱すことなく、不善の道に頼ろうとする者を戒め導かんと願って、世界（下界）を観察していました。(三三・五)

◇ さて或る時或る所、山の稠林の中で、(a) 様々な鹿の群があらゆる所にいる、(b) 清らかな池の睡蓮の香りが穏やかな風に芳しく薫っている、(c) 園林が快適に隣接した、(d) 無数の鳥の群が棲息している樹々がある、(e) 曠りを互いに懐くことをやめた猛獣たちがいる、(f) 静寂そのものの土地である、(g) 多数の小川の水（のしぶき）に濡らされているアティムクタカ（蔓性のジャスミン）やマールアティー（モクセイ科ソケイ）や芭蕉樹の茂みのある、(h) 沢山の牟

尼たちのなすアグニホートラ(火供の儀式)の煙のうす幕のためまるで曇り空のように見える、或る苦行林において、激しい苦行を行い、苦行力という富を有した、或る一人の牟尼(仙人、聖者)が住んでいました。

〔附近の〕動物や鳥たちは、稠林の近隣の地のあちこちで自由気ままに過ごしてから、まるで弟子たちであるかのように、彼の草葺きの庵にやって来て、安らかに休むのでした。〔三三・六〕

◇ また憐れみ深く善良な心をもつその偉大な仙人の〔暮らす〕、様々な樹々があつてとても快適な住まいに、まるで親戚の女が罪の消滅を願って訪れるかのように、毎日〔或る雌象が〕やって来ました。

その雌象は一匹の仔象を伴って、草や葦や若枝を食べながら山の周辺を気ままに歩いて昼間を過ごしてから、彼女の象群がいる領域を忘れて、「彼の家で毎晩」安らかに滞在するのでした。〔三三・七〕

澄んだ心をもった憐れみ深いその牟尼は、絶えず動く鼻先と可愛らしい耳をもつその仔象に対して、息子に勝るほどの愛情を感じていました。〔三三・八〕

人は誰であつても、長く共生を楽しんできた者であれば、どんな相手でも、それが男・女であろうと、動物であろうと、有徳・無徳であろうと、愛情が絶えず湧くものです。〔三三・九〕

その牟尼の手が硬くない竹の葉や柔らかな蓮根を差し出すと、その仔象はゆっくり静かに近づいてきて、丁寧に鼻先で受け取るのです。〔三三・一〇〕

草廬の庭の中にいて、その仔象はうたた寝をして目を閉じたまま、可愛らしい鼻で一匹の鹿の角をゆっくり撫でさすっていました。〔三三・一一〕

また興味が絶えず移り変わるその仔象は、新しい黒雲が出現して孔雀が踊っている時、こっそり後ろから近づくと、孔雀の震え動く青い月輪のある尾羽に眺め入っていました。〔三三・一二〕

面白がつて鹿たちや鳥の群と遊びながら、突き出た額をしきりに振り動かしたり下げたりしている、そんなそ

の仔象に、その牟尼は笑いながら次のように言いました。(三三・一三)

「ああ無邪気な、落ちつきのない子よ、これらの動物や鳥の群はこの草蘆の中庭にまるでアーシユラマ（隱棲処）を飾る装飾品のように「おとなしく」安らかに居るのに、どうしてお前はいつも悩ますのだい？」と。(三三・一四)

竹を破壊して、無数の節の破裂音を起こし、その葉を振り動かして「遊んで」いたその仔は、幾度もその竹を引つ張るうちに鼻を傷つけてしまったので、牟尼はモモタマナの油滴を「傷口に」振りかけてあげました。(三三・一五)

〔今度は〕草蘆の中庭に生えている芭蕉樹をむしって壊している最中だった、その仔を、彼は「とうとう」耳の端を掴んで、外に引つ張ってゆきました。(三三・一六)

しかし「仔象が」再び近くに戻って来て、親しみの情を示しながら鼻を差し伸べる時、彼は頬笑んで「息子よ、どうして「こうも」落ちつきがないのか」と言い、嬉しげに撫でさすりました。(三三・一七)

その仔象は、かの苦行者が沐浴のために蓮池に赴く時は、しばしば仔鹿たちと戯れたり、また草を幾度も根から引き抜いたりしながら、後について行くのでした。(三三・一八)

牟尼は数珠と黒羚羊の皮をその「仔象の」肩の上に置くと、ゆっくりと睡蓮に覆われている蓮池の中に入りました。(三三・一九)

その仔象は何度も顔を上に持ち上げて、甘美な水を飲んだ後、沐浴している彼を池のほとりで待っていました。(三三・二〇)

その後かの大仙はその仔象に伴われてゆっくり蓮池から草蘆に戻って来ました。彼は捧げ物の投入によって焔の先端が揺れ動く火に供物を捧げた後、ナツメとモモタマナをその仔にも与えながら食べました。(三三・二一)

◇ 或る時、かの母象はその仔象を伴って山の森林の中を彷徨っているうち、治癒が難しいパーカラの病（象特有の熱病）に罹って、他世へ逝かせられてしまいました。

かの牟尼は太陽が中天に昇りつつあった頃、沐浴と火の供養をなし終えて、蓮の葉で作った器に色々な果実を置きながら、もうそろそろ食事をしたいと願って、こう考えました。「いったいあの母象はどこかに「仔象と」去つたのだろうか。これまで私は、あの仔象が加わらずに果実や根の食事をしたことがないが。……きっと彼女は自分の群に合流して、遠くへ行ってしまったのだろうか。」そう考え、彼らを見つけようとして、食事も済ませないまま彼は立ち上がると、草蘆の外に出て、後ろについてきた一匹の仔鹿を伴い、水を入れた瓶を持ったまま、「森の中を」あちらこちらと迷い歩き、象の鼻によつて荒らされてシャツラキーの若枝が一面に散らばっているのを（「見」、また象の足が置かれたためダルヴァ草の若葉がすっかり踏み碎かれているのを、また或る場所では象の爪先の衝撃に引き裂かれたムスター草の細片が入り混じる沢山の掘り散らかされた土の塊を（「見」、また別の場所では象の鼻が曳いては壊した竹の先端が至る所に落ちているのを（「見ながら」、その母象の歩いた跡をずっと追ってゆき、彼は不安な興奮から、こうつぶやきました。

「地面の上の、これらの小さめの真つ直ぐな線をつくる足跡は、母親についてゆくあの仔のものだ。」(三三三・三三三)
 ◇ そして、もう少し奥に行つた時、(a) 鼻を丸く巻いたまま、(b) 目をいつまでも閉じたままである、(c) 命が途絶える時の苦痛のため足であがいて地面をこすり削つた跡を残す、(d) 腹部が少し沈んでしまった、(e) 土埃が上に被さつて体が灰白色になっている、(f) 乳を飲みたがるその仔象に乳房をまさぐられている、母象（「の姿」）を彼は見つけて、衝撃的な大きな悲しみに襲われました。

その、赤っぽい睡蓮の茎のような柔らかい母象の両乳房をまさぐっている仔象（「の姿」）を見つめながら、その牟尼は悲しみのあまり目に涙を溢れさせました。(三三三・三三三)

かの苦行者が目には涙を大きく浮かべて、嵩のある螺髻を揺らしながら近づいて来たのを見て、長い間母の乳房を吸おうと欲していたその仔象は起き上がると、彼のほうにやって来ました。(三三・二四)

苦行者は、手首が数珠のために白くなった手をその仔象の上に置くと、憐れみの感情に、その象の頭の隆起部を涙で濡らしながら、慟哭しました。(三三・二五)

「乳飲みたさにのどが渴いて、何度も繰り返し母の乳房をまさぐっているお前〔の姿〕は、敵ですら心を苦しめられずにはいられぬ。まして濡れた心をもつ苦行者たちの心が苦しまないはずがあるか³⁶。(三三・二六)

* ああ何も知らない子、なぜ空しく母の乳房に触っているのか。息子よ、さあ今、お前は水瓶の水を飲みなさい。——このように言って、「口に」水をあてがってやり、その「仔象」は彼の水で次第に「渴きが」満たされました。(三三・二七)

* 「悪しき死王(ヤマ)における〔死の〕命令により、お前のあの母は他の生存へと去ってしまったのだ。だから、さあ来なさい、苦行林に戻ろう。これからずっと、お前を私が守ってあげよう。」(三三・二八)

* それから次第に苦行林に近づいてゆきましたが、垂れ下がっている一枚の木の葉を手で掴むと、彼は涙の水滴を顔から落とし、哀れさのあまり、再び語りました。(三三・二九)

* 「お前は柔らかな葉のついた枝をあゝの母の鼻先から掴み取ったりしていたものだ。まるで水のように涼しい太陽光に浸されるかのように、幾度も幾度も、あの母から、その乳房という愛情によって、豊かな乳をお前は受けとってきたのだ。しかしこの地にもうあの母がいけない以上、この独りになってしまったお前はこれからどうやって遊ぶのだろうか。」(三三・三〇)

◇ * その時、燃える木炭の山の中央に置かれた黄金の器を思わせる〔神々の都という〕円盤を〔中央に〕有するスメール山の頂に、光明を有するインドラ(千眼の神)がおり、〔彼らを観察していました〕。

* その仔象が柔らかな新鮮な草を一口食べ、わずかな水を一口飲んだ後、かの牟尼はその仔が寝るために暗緑色の草と木葉を寝床として撒いてあげて、目に何度も涙を溢れさせ、つぶやきました。

* 「毎夜毎夜、寝るお前のために世話をしてくれていた、あの母象はもういないのだ。どのように今晚、お前は恐れを抱いてここに横になるのだろうか。」(三三三・三三)

◇ * その仔が眠りに入った後、朝夕の祈禱を唱えること、齋戒に住すること、火に仕えること(「の仕事」)をもつその牟尼は、草葺きの庵に入りましたが、乏しい眠気を払って、夜のあいだ繰り返し「庵の」外に出て行つては、愛しい者と一緒について、「その寝姿を」眺めていました。

* 様々な鳥の群が目覚めだす、輝く夜明けの頃、彼は鹿の皮で覆われた草のベッドから起き上がるや否や、草庵の門の所までやって来ると、そつと数珠を巻いた手でその仔を撫でさすりながら泣き、それから「庵に」戻つて来ました。

* その時、菩薩(インドラ)の天眼は、その象の仔をひどく愛するあまりに強い執著に縛られているその仙人を観て、このように考えました。

* 「この牟尼は親族への愛を捨てて、森に住んできた。しかしこの者はその地においても、いつそうの愛情を象の仔に対して抱いているのだ。(三三三・三三)

◇ * そのため、いま私は行つて、判断力を失っているこの仙人を教え諭してあげねばならぬ。」——そう考えると、光を発する美しい装飾品やインドラの武器のすべてをしまつて、見えなくすると、生類に対してなすべき務めへの努力を衰えさせないその神々の王は、ただちにかの者のもとにやって来ました。(三三三・三三)

◇ * やつて来ると、「私は方便をもつて、牟尼がもつ善品を妨げるものであるこの愛情を、この仔象から離れさせよう」と考えました。その偉大な心の方(インドラ)は、その象の仔が死にそうになって、幾度も足を置き直しては

繰り返しひどく苦しうに頭をもたげて病氣のために横たわっている様に神通力によって〔現出し、仔象の本当の姿を〕不可視にしました。

* その牟尼は〔その仔象の様子を見て〕不意に、「この動作、これは何か」と思い、その仔と死別することを恐れるあまり、近づいて、「ああかわいい子、お前も理由なく、敵である死王（ヤマ）に殺されてしまうのか」と叫びました。激しい悲しみが〔彼を〕襲い、まるで瀕死のように施すべがないその仔を見つめながら、何度も何度も次のように〔眩き〕泣きました。

* 「かつて、まだ牙も生えていないこの仔は、一体どうやったのか蓮根を泥沼から掘り出し、戯れにそれらを集めて、運んできたものだ。〔三三・三四〕

* また、祭火堂の中に居る私が火を供養していると、戸口で両耳を揺らしながら〔待つて〕いたものだ。〔お前がいなくなったら〕、誰が前で〔私を〕待つというのか。〔三三・三五〕

* 舌のように細い指のような突起があつて、だんだん〔伸びて〕とても細くなる鼻の先端をもつ〔お前〕。―ああ一体誰が、その鼻で、再びまた私の手から蓮根を掴むのか。〔三三・三六〕

* もしお前が生きながらえることが出来ないなら、お前は死んだと見なして、足で鼻先を踏んであげれば、〔苦しまずに〕命はたちまち途絶えるだろう。〔三三・三七〕

* たちまちにお前がああ世に逝つてしまつたら、目的を達したかの死神の支配領域へと去つてしまつたお前に、私はもう会えない。〔三三・三八〕

* かわいい子よ、もし私がお前のうえに何もすることがなくなるのなら、〔私の〕この意識も、苦しみの毒による失神の力によつて、もう戻ることはあるまい。〔三三・三九〕

* かの聖教を受持して〔世に〕出生する者たち、また解脱の境地に住する者たちは、愛しい者を、まるで化作

されたもの(幻)のように恐れて、遠ざける。(三三・四〇)

*とても善い聖教を見たいと願っているのに、私が持っている凡人性を「こうして」守ることで、この心は後できつと後悔するだろう。(三三・四一)

*太陽が空の真ん中に来た時、蓮華に覆われた池に水浴びに行つて、母象の乳房から離れて、鼻の先を揺らししている「お前」。—ああ今日は、いかなる象に私はついて行つたらよいのだろう。(三三・四二)

*牙で高い木を破壊したり、河の周辺の土やクシャ草の切れ端を「体に」つけたまま、マダのせいで緑の岸辺に穴を開けたりしている、「大人の象になった」お前の端正な顔が私にはもう見られないのだ——美しさと魅するその耳によつて「生じた」風によつてうろうろと飛び巡っている蜜蜂たちがいる、「お前の」顔が。(三三・四三)

*まるで顔を通して心から外に溢れ出たものであるかのような「涙」、眼に捉えられていたかのように「溜まつた」涙が、途切れることのない細い涙の滴りとなつて、傷がある仔象を濡らしました。「その時」近づいて「牟尼の鳴咽を」聞きつけた女たち(精霊たち?)、善い言葉を語る者たちは「このように」遠くで声を発しました。「愛情という」少しの欲びに依存する者たちは、他者に依らねばならないので、非力です」と。(三三・四四)

*このようにして、肩のあたりまで鹿皮がずり落ちてしまつてゐる、痩せ細つた体の「仙人」は、地面に立つたまま、その仔象に両眼を向けていました。泣き続け、悲しみに苦しんでゐるその牟尼への憐憫によつて、住居の場所にある樹々は、花々のまわりを巡つてゐる蜜蜂たちの音によつてまるで「もらい泣きの」声を立ててゐるかのようでした。(三三・四五)

◇ *その時神々の王は、一瞬でそのあり方から、(a)「頭に」羊樹のように曲がつた重たい螺髻の髪束を結んで肩の上まで載せてゐる、(b)水を入れた瓶をぶら下げた杖を持った、(c)胸を「黒羚羊の」皮で覆つた、(d)手首のあた

りに「数珠のように」蓮の華鬘を巻いた、(e)〔指に〕草の根とクシヤ草を少し挿んだ、(f)腿の所には垂れ下がった樹葉の衣を着けている、(g)まるで『感官の寂靜』が具現化した姿のような婆羅門らしい聖なる光輝をもつ、苦行者の姿へと化作して、仙人に近づいて来ると、次のように語りました。

* 「偉大な仙人よ、自分の家族の中の愛する者を見ながら、その死の苦しみを耐えることが出来ないで、あなたはどのように泣いているが、それは象の沐浴のようなものです⁽³⁷⁾。〔それで〕何を成し遂げることが出来るでしょうか。

* 感覚の対象への欲望をきれいな皮で覆っているものであるこの身体〔への愛着〕と、家族の束縛という悪徳を捨て去ったはずの、あなたのこの啼泣は、牟尼である人々〔の行為〕と合致せず、愛情の束縛ゆえに知性が盲目になつていたので、知性ある者たちにとっては、笑うべきことなのです。^(三三・四六)

* 「死者に対して」生じた愛情をもつ者たちが泣いて苦しみの声を発すること、すぐさま涙をこぼすことが、もし死王(ヤマ)の国に逝ってしまった愛する者たちのために相応しいことならば、全ての大地で「人々は」このようにして、生きている間ずっと「悼んで」泣き続けるべきなのでしょうか。^(三三・四七)

* 善行の小さな果報のゆえに、たとえ寿命と繁栄を十分に具えても、その状態は生き物たちにとってたちまち消えてしまうものです。譬えば、「火にくべる」供物を手に持った親族の吐息によつて煽られて少しだけ「炎が」光り輝いても、薄くて青黒い一ひらの「煙として」、火のすべての火花が「灌がれた」水にたちまち消えてしまふように。^(三三・四八)

* 譬えば一匹の象が、明白な恐怖によつて苦しみを生じ、自由な幸せを欲する故に、太过于高い繫柱を引き抜いて「象舎から逃亡する」ように、あなたが「かつて」明白な恐怖によつて苦しみを生じ、自由な幸せを欲する故に、心の力によつて、家族への堅い愛情を根から「引き抜いて」森に去つたのなら、なぜ「いまさら」堅

固なこの愛情という捕縛の繩を、再び自分に投げかけるのですか。(三三三・四九)

* 過去の劫において、すぐれた苦行者たちであった婆羅門たちの先駆者であるアラネーミは、人の寿命が八万年の時に出現しましたのに、彼は「命は過ぎ去るものである」と知って、資財を捨てて、森に住んだのです⁽³⁸⁾。しかるに今、寿命はごく短いのに、愚か者たちは「家族への愛情に」執着して、どうしても捨てることをしませんが。(三三三・五〇)

* 秋になれば雲は水を全く失いますし、蔓のような雷光も雲から姿を消します。動・不動のもの(動物・植物と無生物)から成るこの全世界で、何か、自性として相互に離れないものが見出されたことがかつてあったでしょうか。(三三三・五一)

束の間の欲望から結ばれた者も、生活の場を共有していた者も、たとえ様々な感情をすべて表現し合っているも、人は皆たちまち愛した者を捨て去るものです——光がランプから出るように、あつという間に。(三三三・五二) 射手によってどんなに高く弓が発出され、どんなに遠くまで飛んでいても、結局は落ちてしまうのと同様に、「生き物は」どんなに努力をなして己が体を守ったとしても、最後には必ず衰落(死)があります。(三三三・五三)

『死』というこの悪しき者は、幼い子でも少年でも、青年でも老人でも、愚者でもヴェーダ学者でも、見逃すこととはありません。それは山林に入った火が「すべてを呑み込んで」どこまでも伝い、広がりゆくようなものです。(三三三・五四)

この命というものはたちまち過ぎ去るものであること、諸々の享樂は水の急流のように移ろいゆくものであることを理解し、賢者はそれ故、『法の身体』(ダルマ・シャリーラ)⁽⁴⁰⁾の獲得としての『寂滅』に向かつて、絶えざる努力をしてゆくのです。(三三三・五五)

輪廻的生存のある限り、ずっと『法の身体』が他世界へ逝きつつある(自分に)随行する様な、そのような人

物を、賢者たちは「同伴者をもつ者」と見なします。それ以外の者は、たとえば親友を持つていようと〔死時に〕同伴者をもちません。〔三三・五六〕

いつも老・病・死が生じる三界中の生存において、誰が平気な心でいられるでしょうか。もし焼ける家の中でもかまわず寝ていようと望む人がいれば、怠惰で無思慮な者たちの中でも最高位に置かれることでしょう。〔三・五七〕

賢者にとって、苦悩の拡大につながる故に、何かの存在と強い愛情の絆を結ぶことは適切ではありません。〔譬えば〕生きていたいと望む人の誰がいったい、シューと音をたてる恐ろしい毒蛇の穴の中に、呪文も得ていないのに、わざわざ手を入れるでしょうか。〔三三・五八〕

「あたかもランプを手に掲げ持つ者のように、私は有（輪廻的生存）の頂きから、どの人を殺そうかと見渡しているのだ」と〔言わんばかりに〕、かの『無常性』は、怠惰な無思慮さの故に何ら対策をなそうとしない愚かな者たちを〔眺め〕、あざ笑っているかのようにです。〔三三・五九〕

生き物たちの命の持続が長くないことは言うまでもありません。それは速く流れる水の中に投げ込まれた一握りの塵のようなものです。〔三三・六〇〕

もし人が何かの存在の上に結びつけている愛情の糸を切ることができないなら、その愚迷者はいつ〔輪廻という〕生から生への大いなる連鎖を断ち切ることができのでしょうか。〔三三・六一〕

〔それを認識し〕 決意した者たちは、『智慧』という斧をもって、その〔生の連鎖〕を断ち切るのです。それ故、『智慧』の増大を願う善き人は、最高の聖者たちに親近すべきです。〔三三・六二〕

ちっぽけなもの、大きなもの、遠くのもの、近くのもの——何であろうと、賢者は無常性の故に、それを「私の所有だ」と思つてはなりません。〔三三・六三〕

そうして、肉体（色）などの〔生命存在の構成要素たる〕集まり（五蘊）は瞬時に滅しゆく故に、それらを厭う時、離貪した人は愛著を離れて、解脱に達することができます。（三三・六四）

「私は解脱した」と認識し、清らかな知と見（解脱知見）をもつ者として、「自己の誕生を滅ぼし終わった」と知れば、かくして、もう再生を見ることはないのです。（三三・六五）

美しい昼咲きの蓮も、花卉などの〔構成要素の〕集まりがなければ存在しません。それと同じように、肉体（色）などの集まり（五蘊）を離れて、心の働きをもつもの（我）が〔別に〕有るとは、智者は見ません。（三三・六六）

◇ その時、輪廻のあり方（自性）を明らかにした菩薩（インドラ）の言葉を聞いて、すでに悲歎の心を離れたかの牟尼は、「ああ見事です。見事にお語りになりました」と讃歎してから、こう語りました。

「あなたの口から発せられた『言葉』という月光を得て、私が持っていたこの迷妄の闇はただちに消え去りました。（三三・六七）

愚かな者も、智慧ある指導者の下で愚かさや脱することができません。太陽が昇れば、蓮も必ず閉じた状態を脱するのです。（三三・六八）

◇ 菩薩は言いました。「それについては贅言を要しません。

智者は、行為者がなした善と悪の行いが必ず幸福と不幸をもたらすことを認識して、「心身の」安らかさを壊してしまいう程に諸感官に支配された状態に自身を導いてはなりません。感官の対象に向けず、途切れることのない憶念（マインドフルネス）を保持する者は、究極の達成を得るのです。——この教えを、導師（グル）たちから受け得た人は、臨終の際に苦しむことはありません。（三三・六九）

◇ 「そして続けて言いました。」「しかしお見事、ご立派です、大仙よ。あなたはすばやく事の本質を見極める知性をお持ちです。これで私は苦勞した甲斐があったというものです。この点で、こんな言葉があります。

聞いた途端にすべての事を理解するような聴き手には、ぜひ教え聞かせるべきである。二度繰り返し説かれて理解する者なら、説き手の言葉はそれでも甲斐がある。しかし何度も明晰に語ったにもかかわらず、理解しないのであれば、人形の様なその者には不毛な疲労を得るだけであるから、賢者は沈黙の誓行をなすのがよい。」④

〔三三・七〇〕

◇その後、「われはインドラである——わが神力により、この仔象は再び蘇れ！」と、彼はそう言葉を発して、神通力によってその仔象を起き上がらせました。かの牟尼は甚だ驚きました。

太陽の輝きを恥じ入らせるほどに眩しい王冠の光をもち、また清澄な大宝石のある真珠の紐飾りの光耀が頸のまわりを覆っている、そのインドラ神の姿を再び取った菩薩は、たちまちバララーマの衣のように青黒い虚空の中へ去って行きました。〔三三・七一〕

◇かの牟尼はその仔象を伴って、歡喜した心で再び苦行林に入りました。

長い時が経ち、仔象であった時が過ぎると、その象は森の奥の四方の空間をマダ液で薫らせながら、広大な山麓の地を領分として、牙の打撃によって敵対する象たちを追ひ払う、象王になりました。〔三三・七二〕

その象は、或る時には女の乳房に似た形の果実が沢山ついたビルヴァ（ゾウノリンゴ）の枝を掴み、折り取って牟尼に与えました。また〔別の時には〕「雨水に濡れている幾つもの実をつけたマンゴーの枝々を彼のもとに運んできました。〔三三・七三〕

心を有する者（生物）の一体いかなる者が、(a) 憐れみ深く、(b) いつでも徳ある行為をなすことをためらわない、(c) 心の底（本性）から同情的な暖かい優しさを示す、(d) 偉大な精神を有する、(e) かつて「自分を」助けてくれた、一人の聖者に対して、心にいつまでも続く愛を持たないということがあるでしょうか。〔三三・七四〕

「かわいい息子よ、ムスター草（マハスケ）を裂いた芳香を漂わせ、幾筋ものマダ液を滴らせているお前は、な

んと大きくなったことか」と、そう、その〔巨象〕に言いながら、かの牟尼は、岩壁で擦ったため一部分に傷ができた牙を撫でました。〔三三・七五〕

さらに〔言葉を続け〕、(a)あたりを飛び回る蜜蜂が芳しい匂いがする〔頭部の〕マダ液を飲もうとするのを軽く耳をばたつかせて追い払っている、(b)他の象王たちの牙によって切られた傷痕が頭にある、その象に向かつて、説き聞かせる者の中でも最も巧みな者である彼は次のように言つて聞かせました。〔三三・七六〕

「象王よ、[そのように] 耳を振るることによつて芳香あるマダ液(ダーナ)を飲みたがっている蜂たちを追い払つてはいけないよ。あまりにひどく〔施者の〕侮蔑的な態度によつて損なわれた布施(ダーナ)は、どれほど量があつても、乞う者たちに喜びを少しも与えないものだからね。〔三三・七七〕

象王よ、もしお前がいつまでも竹で暗い林の中で〔自分の〕群を守りたいと願うのなら、そして操縦者が打ち刺す突き棒の尖端が起す苦痛を望まないのなら、お前は人王たちが派遣した雌の象たちの後を追つてはいけないよ。もし賢く〔行動でき〕ないなら、誰が一体、愛執から大きな災いへと巻き込まれずにいられるだろうか。〔三三・七八〕

さあ今頃、お前の群がきつと、お前のこめかみに擦られてマダ液が付着した〔あちこちの土手の〕土を嗅ぎ、また〔お前の〕寢床だった場所の、叢の草の先が裂かれ、〔通つた道の〕へりのあたりが牙に傷つけられているのを眺めて、口いっぱいに啞えていた草を口から離し、首をもたげて、お前のことを恋しがっているよ。だから行きなさい、群の王よ。顔のまわりを飛ぶ蜜蜂たちに褒め歌われているお前は、また再び私に会えよう。〔三三・七九〕



その立派な巨象がやがて群に戻つていった時、かの牟尼は草庵に入り、禪定に深く専念しました。

— さあ、このように、かの世尊(釈尊)があらゆる生を経る中で、決して利他を怠ることがなかったことをよく

考えて、あなた方は彼の教えを遵守する者でありなさい。

『ジャクラ（帝釈天）・ジャータカ』、〔第四部類の〕第三話〔終わる〕。

【注】

(1) ハリバッタの梵文の新しい出版である Straube 版では、この作品は全三四話ではなく三五話から成る。それは本来三四話で完結すべき作品の最後の位置に、釈尊の成道までを語る短い仏伝の作品を、*Sarvāṅśudhātaka* という章名をもって第三章として置いたためである。その仏伝はたしかにハリバッタの蔵訳においても、三四の章が終わった後の位置に置かれている。その仏伝の章はチベットで蔵訳が作られた一二世紀より前からインドで三四章の後に加えられていたことは疑えない。しかしこの最終章の仏伝は作者より後の時代の編集者によって付け加えられた可能性がある。少なくともそれはハリバッタが最初に構想したジャータカマラーの作品の形ではないであろう。ハリバッタはアーリヤシューラの作品の写本に倣って全三四話で完結すべき作品を構想したはずであるし、菩薩の「六波羅蜜」の区分の中で三四の各話を配置して作ったのであり、もしその作品に六波羅蜜のどの区分に入らない仏伝が加えられたとしたら、それはあくまで本編に対する付録的な扱いで加えられたにすぎないことになる。確かにその仏伝作品（増広された梵文 *Saṅgamaṅgāṭaka* の原形としての仏伝テキスト）はハリバッタの真作であった可能性は否定できないので、その点で私は Hahn 博士よりも Straube (2018) の意見に賛成である。ただし、真作である可能性が強いといっても、写本伝統でそれが三四章の後に置かれてきたという理由だけでは真作でないという疑惑を完全に払拭することは難しいので、今後もその仏伝と他の作品との比較など様々な角度からの研究が必要である。文体が似ているという理由で著者不明の仏伝テキストがインドの或る時代にハリバッタの写本に加えられた可能性もある。もし真作であったとしても、その場合、ハリバッタが彼のジャータカマラーとは別の独立した作品として書いたものが、数世紀後の時代の人によって、作者が同じである（らしい）という理由で、三四章から成るジャータカマラーの写本の後ろに付け加えられたと見なす方がよいのではないか。ハリバッタほどの大詩人が一作品しか作らなかったとは考えられないので、第三章の仏伝は彼の複数の作品の一つであったものが後代に付加された可能性がある。第三章の最後に、作者による「作品終結の言葉」と思われる一詩節（三四・七四）が置かれているので、ハリバッタはそこで彼の作品を完結する考えをもっていたと思われる。また釈尊の現世の物語である仏伝作品に *Jātaka* の語を付けて名付けた第三章のタイトル

*Sarvathasiddhajātaka には、少なからず違和感を感じざるを得ない。そもそも誕生から成道の出来事までをジャータカ（前生譚）と見なしてよいのだろうか。その奇妙な章名は作者の責任ではなく、三四のすべての章の名が *ātaka* である作品本体と合体させて第三章にするために後の時代の編集者が機械的に *ātaka* を付けたせいではないだろうか。むしろ *ātaka* を取って、*Sarvathasiddhajātaka ではなく、*Savathasiddha というタイトルにして、先の三四の章とは別扱いにした方が、無理が無いように思う。以上の私の意見をまとめるなら、第三章が真作かどうかは今後も検討の余地があるが、真作の可能性は全くは否定すべきではない。ただしハリバッタの作品は構想として三四章で完結しているときで、第三章は別の作品かもしれず、もし真作であったとしても、ハリバッタが自らの手で第三章という形にしたかどうかは不明である——ということになる。

- (2) Hahn (2005, p. 9) の計算によれば、この作品の最後にある釈尊の仏伝 35、*Savathasiddha を除外した全体の三四の章のうち、二二パーセントの梵文が失われ、七八パーセントの梵文が現存する。梵文が完全な形で伝わる章は第一―八、一一―二二、一九―二〇、二二―二四、二六、三二、三四章である。梵文の一部が欠けて伝わる章は第九、一四、一六、一八、二五、二七―三〇、三三章である。全く梵文がない章は第一〇、一三、一五、一七、二二、三二章である。なお梵文が現存する章のうち、Hahn 博士の死後に Strabe 校訂版で初めて梵文が発表された章は第九、一六、一八、二二、二五、二七―三〇、三三、三四章であって、それらは第二三と三四章以外は梵文が部分的に欠損した章である。

(3) このハリバッタの蔵訳は、梵文を知らずにチベット訳だけを読んで読み手が理解できるようにする配慮がほとんどなされていない、甚だ機械的な翻訳であって、意味が曖昧な箇所がかなりある。早い速度で梵文の語順をあまり変えることなく通り一遍の逐字的翻訳を済ませた初段階の作業を終えた後、本来はなすべきであったはずの、訳文を再度練り直す第二段階の作業に進むことなく、草稿のまま放置して訳出を完了させてしまった仕事らしい。梵文の一語一句にひたすら蔵訳を貼り付けていった最初の作業段階の訳文がそのまま残されたという点で、チベットでの翻訳作業の手順を知る好適な資料であるといえるが、この作品がチベット人にとっても大変読みづらい文献であることは疑いなく、名訳と言われるアーリヤシューラの蔵訳とは明暗を分けた。

- (4) この点に確証はない。しかし例えば第二六話ジャージュヴァリンは、仏典の中にもその話の短い伝承がパラル文献として見つかるものの、Hahn (2005) が明らかにしたように、ハリバッタは仏典ではなく大叙事詩マハーラータにあるその話を直接利用してその章を作った可能性が高い。—恐らくハリバッタの作品では聖典に仕える侍女たるべき仏教文学と主人たるべき聖典との上下関係がやや揺らいでいることがインドの敬虔な仏教徒たちからは批判の対象となつたであろう。ソースが聖なる伝承（経蔵に属する

『ジャータカ』であることを意識して、話の筋を必要以上に変えぬよう注意しながら詩作したアリーヤシューラの立場と、素材に用いた伝承への忠実性以上にカーヴィヤとしての作品の芸術的な出来具合を重んじるハリバッタの立場が、作品の評価でぶつかることがあつたであろう。ハリバッタがこの作品の『序』の詩節〇・四において自ら、「世の人々は私の作品を笑うかもしれませんが」とか「恥を知らないと言いかもしませんが」と、世間からの批判を覚悟した言葉をわざわざ述べているのは、そのあたりに理由があるのかも知れない。『序』の〇・三で、彼は「このことを私も心得ております——偉大な詩人たちは甚だアーガマ（部派仏教の阿含聖典）に精通しているので、その詩作は世に広まっていることを。」と記してから、しかし「自分の目的『達成』の希求が得意である私は、菩薩の行為（ジャータカ）の宣布において言葉を用います」と彼は作品の抱負を語っている。つまり私自分の詩人としての立場は、聖典に精通したアリーヤシューラなどの先の偉大な詩人の立場とは同じではないと表明したのである。なお後の時代にチベット仏教の僧団がハリバッタよりもアリーヤシューラなどの先の偉大な詩人の方を尊び、評価したのは、蔵訳の翻訳としての質の相違のせいもあるが、もう一つには、仏説たるジャータカの伝承に対してハリバッタほど自由な書き方をしていない、その精神的な態度を評価したと思われる。篤信の仏教徒は恐らくハリバッタがもつ、伝承の聖性をさほど重視せずに感動を与える詩芸術としての完成度を優先させる姿勢を、危険な墮落の兆候として疑ったのではないだろうか。ハリバッタでは女性たちが主人公として出てくる新しさも、軽佻浮薄と見なされたかも知れない。こうしてハリバッタの作品は宗教書としての評価は高くなかったかも知れないが、詩芸術としてそれはインド仏教のカーヴィヤ文学が完熟期において到達しえた最高の地点をなすことは疑えない。

- (5) 第九話ブラフマダッタは蔵訳から判断して全四一詩節から成るが、第二六詩節の *paṭṭa b* からこの章の最後までこの箇所の梵文が写本の欠損により失われている。本話には Hahn & Lohrke (2016) の独訳と Khoroche (2017) の英訳がある。——なお、本話のパラレル文献は ① *Avadānasataka*, 32 *Kavada* (Tib.: *Tshangs pas byin = "Brahmadatta")* 大正 No. 200 『撰集百緣経』(2) 「梵与王施婆羅門殺縁」 T4 217c-218a; ② *Diyāvadana*, 20 *Kanakavarnāvadana*; ③ *Bodhisattvāvadānakalpalatā*, 42 *Kanakavarnāvadana*; ④ 大正 No. 162 『金色王経』 T3, 388a-390c; ⑤ 大正 No. 155 『佛説菩薩本行経』中の一話 T3 109c-110b.

(6) この九・二と九・三の詩節は、八・七と八・八の詩節と同文である。実は第八話（第八章）に連続して存在する六つの詩節はすべて他の章からの逐字的借用らしい。すなわち第八話の七と八は第九話の二と三の借用、その次の第八話の九と一〇は第二〇話の二と三の借用、その次の第八話の一と二は第三三話の二と三の詩節の借用として説明できる。Straub (2019, 476) が記すように、韻律の変化から考えてもそう見るのが妥当である。このような現存写本に見られる第八話への六つの詩節の付加増広はハリバッタ本

人がわざわざ行ったものとは思えない。写本の伝承の中で生じたものであろう。その推測に基づき、写本の伝承どおりの形を示す Hahn 校訂本の第八話にあるそれらの六つの詩節は、Strube 新校訂本ではすべて削除されている。その結果、第八話の詩節番号が八・七から Hahn 校訂本（とそれに基づく私の発表済みの和訳）と六すつずれることになった。

(7) チャータカ鳥は、どれほど渴しても特定の時期に降ってくる雨滴を欲し、それだけを飲んで生きていくといわれる鳥。ホトトギス科チャバラカッコウ。

(8) この第二詩節は名句として Vallabhadēva の *Subhāṣṭāvai* に引用された (3476)。

(9) マーンドラはインドラ神の天界にある五神樹の一つ。地上の樹としては真っ赤な花を咲かせるデイゴにあたる。

(10) 第九話と散文の途中での、ここから本話の章末までの文は、梵文（写本第二葉）が失われているため蔵訳から訳した部分である。

(11) ここで私が「まるで全身を黄金の装飾品によって飾られている象の姿に似た」と訳した箇所原文の蔵訳は (1) *gser gyi rgyan gyis bgyan par byas pa'i glang po che dang 'dra bar* (2) *kun nas gser gyi rgyan gyis bgyan pa'i glang po che bzhin du* である。その (1) と (2) との二つの蔵訳の文は、内容から判断して恐らく同一の梵文をやや違った形で訳したものである。つまり訳する時に、少し違う訳を二種類作ってそれを紙に記した後、片方の訳を削り忘れたのであろう。これと同じ様な、推敲前の訳と推敲後の訳がどちらも残ってしまったというミスは、第二五話の第二八詩節の蔵訳でも起こっている。このことからハリバッタの蔵訳が訳出後に一度もチェックされず、校閲の機会を得なかったことがわかる。

(12) 「療治を〔離れる〕如く」と訳した *gyen dang 'dra bar* は、或いは「親族を〔離れ去る〕如く」と訳す可能性もある。なお、涼しくなったので梅檀から離れるこの蛇たちの行動は、HJM 128+ の箇所でも表現される。

(13) 原文の *mchu dang* の語を *mchu 'ing* 「長い嘴」の間違いと見て訳した。つまり鸚鵡がフトモモの木の葉の形に似た長い嘴をもつ、と解釈した。

(14) 原文の *bar khyab pa* を **sar khyab pa* と読み、「覆われた大地」と訳した。英訳 (Khoroché p. 71) も同様の解釈を示す。

(15) 第二話ダルダラは現在まで梵文が見つかっておらず、蔵訳のみによって知られる章である。この章について、Michael Hahn (1979) は学界で初めて、その蔵訳の校訂テキスト・独訳・語彙を発表し、説話内容の分析と並行話の考察を行った。同時に蔵訳のその章は Hahn 博士の『古典チベット語教本』（初版 1971, Hamburg）で練習用の読み物として用いられ、改訂第七版の Hahn (1996) ではその

蔵訳テキストと語彙が *Lesestück III* (S. 246-256) にある。(私は改訂前の教科書により、かつてマールブルク大学でその蔵訳テキストの授業を受けた。)その後教科書の虎の巻である Hahn (2003) の本が出たが、その蔵訳の独訳と脚註は *Lesestück III* (S. 24-23) にあって、以前の翻訳とは少し意見を変えている所もある。私は今回蔵訳から和訳するにあたって、Hahn 先生のそれらの仕事を活用させて頂いたが、しかし自分なりの解釈を取った箇所もある。―このハリバッタの第二話のバラレル文献として、少なくとも次の三つがある。① パーリー・シヤータカ 304 *Daddarajataka*、② 大正 No. 152 『六度集経』巻第五(四人) T3 27c、③ 大正 No. 203 『雜宝藏経』卷三「(二九) 龍王偈縁」T4, 461b-463c。これらのダルダラ章の資料は Hahn & Schmidt-Glinzer (1979) によって『雜宝藏経』を中心に内容が吟味された。

(16) Hahn (1975, 85-86) は 213+ のこの文が『雜宝藏経』にある次の文 (T4, 464a9-13) と類似することを指摘し、文の由来を考察している。「大威徳ありて龍形を厭い、恒に善趣に向い人と作らんと求む。若し沙門婆羅門の淨戒を修持し又多聞なるを見ば、形を変じて供養し常に親近し、八日と十四十五日、八戒を受持して心意を検し、己が住処を捨てて他方に詣す」。ハリバッタのソースは明らかに南伝の *Daddarajataka* よりも北伝に近いことがわかる。

(17) Hahn (2003, 57) の提案に従い、*pāda b* の *ni'gro ba* を *ni'gro ba* と読んだ。

(18) *chu tai'gdong gi me* 「水の馬の口の火」の訳は梵語の **vadānāmkhāni* 「雌馬の口の火」(南極の水底にあると信じられる地獄の入口の火)にあたる。Hahn (1997), *Glossar*, S. 290 を参照。

(19) この文について Hahn (1979, 101) と Hahn (1996, 253) はそれぞれ異なる解釈を示す。

(20) 第二九話ニルパマーは蔵訳から判断して全三六詩節から成るが、第二九詩節の *pāda b* から話の最後(第三六詩節)までの箇所の梵文が写本の欠損により失われている。本話には Khorothe (2012) の英訳がある。なお、本話のバラレル文献は今のところ不明である。

(21) 第二九話のこの第二九詩節 *pāda b* 以降、本話の章末までは梵文写本の欠損のため、蔵訳から訳した部分である。

(22) 蔵訳において、この第三一詩節 (*de nas brian moi' dhus [...] gos bskyur ro*) は五句 (5 *pāda*) から成る。

(23) 蔵訳上、この第三四詩節は二句 (2 *pāda*) のみから成る韻文であるが、ただし二句の詩は異例なので、元の梵文は散文であったかも知れない。

(24) この第二九話の末尾で締め括りの散文の後に置かれた第三六詩節は、その置かれた位置から判断して後の時代に付加された詩節である可能性が高い。

(25) 第三一話スヤートラの章は梵文が見つかっておらず、蔵訳のみによって知られる章である。本章について Hahn (1980) の論文は Udaya-jātaka という名でその蔵訳テキスト・独訳・並行話の比較研究・語彙を発表した。また Hahn 博士の『古典チベット語教本』では練習用の読本としてこの章が用いられた。教科書の初版 (1971) では Sugata-jātaka という章名であったが、後の版で Udaya-jātaka に改められた。その教科書の改訂第七版の Hahn (1996) では Lesestück IV (257-266) にその章の蔵訳テキストと語彙がある。またその教科書の虎の巻である Hahn (2003) では Lesestück IV (6473) において少し修正した独訳と脚註が示された。私はそれらを参照しながら、今回の蔵訳からの和訳を作成した。

(26) この詩節の pāda a の bde bai cha の語を Hahn 博士は梵語の *sukhabhāga 「幸いなる運命」を訳したものと推測するが、私は *sukhaleśa の訳語であると見て、「わずかな快樂」と訳した。bde bai cha の語は HM 14.11 や 25.240 にもあり、それらの箇所では sukhaleśa の訳語であるからである。また pāda bc の sems kyī // sems の語を Hahn 先生は *citta-caiśaśka 「心・心所」(心王と種々の心作用) の訳語と推測するが、詩として美しい語なので、私はここでそれとは異なる解釈を取った。

(27) ハリバッタの第三一話のタイトルでもある本話の主人公の梵語名は未だ不明のまま、学問的に確定出来ない名であるが、今回は Martin Straube (2019, pp. 15-16) の意見に従い、その名をスヤートラ Svātara とした。本話の主人公の名は蔵訳では legs gro であり、第三章のコロフォンにそう記されている。ただし第三章の蔵訳が完了した後の位置に置かれた四つの詩節の三番目の詩節には、ハリバッタの第三章から三五章までの五つの章名を列挙する文 (uddāna) があって、ここでは第三一話のタイトルを rab gro と記している (北京版 233b5, デルゲ版 197a2)。このように legs gro ではない別の読み rab gro も蔵訳に存在する。xvii Michal Hahn 博士はハリバッタを研究し始めた最初の頃の発表において、蔵訳の legs gro に相当する梵語名は Sugata であると推測していたが、しかし Hahn (1980) の論文でそれを修正して梵語名をウタヤ *Udaya であると考えた。通常、蔵訳 legs gro にあたる梵語を *Udaya と見なすことは出来ないが、Hahn (1980) は類話がパーリのジャータカ第四五八話 Udaya-jātaka にあると見て、それを根拠に主人公の名を *Udaya と推測したのである。そのジャータカとハリバッタの話比べてみると、ハリバッタで説かれる「主人公の男が三日の間、女のもとにもたらす贈物を一日ごとに価値のより劣ったものに変えていったが、その理由を尋ねられると、男は『一日ごとに人の美は減少するからだ』と返答した」という、命や若さの美の無常を示す教訓的モチーフと、よく趣旨が似たものがそのジャータカにも第四四詩節にあるので、その点で両作品は確かに似ていると言える。しかしその教訓的なモチーフ以外の話の要素についてはとても不一致が多く、そもそも全体的に話が大きく違っている。そのため、そのパーリの本話を本当にハリバッタの本話

に相当するパラレル文献と見なしてよいかどうか、深刻な疑問が湧くのは否めない。**Udaya* の名に関してはこのように元々根拠が相当に弱かったこともあり、Hahn 博士は自らその後さぶに意見を変えて、Hahn (2011a, p. 12) の表の中で本話のタイトル、つまり主人公の名を **Yayā* (㊸) と記した。この意見の変更は、二〇〇四年にチベットで見つかったハリバッタの梵文写本 B の最後の葉に全三五話の各章のタイトル一覧が記されていて、そこにある文字を判読した結果と思われる。現存する梵文写本にはこの第三一話の梵文テキストの全部が欠けているので、梵文写本 B にあるその各章のタイトル一覧の箇所を記述だけが唯一の手がかりとなるが、しかしそこに記された本話のタイトルの箇所は判読が困難で、Straube (2019, pp. 15-16, 20) によれば B の写真から読み取れる本話のタイトルは [yayābṛja] である。(ただし [pāpābṛja] 或いは [śāśābṛja] と読む可能性もある。) その不明瞭な文字 [yayābṛja] をめぐって Hahn 博士は **Yayā* の名を考えたのに対し、Straube 博士は **Suyāra* の名を推測した。少なくとも最後の字 [bṛja] の母音は *i* とは読めないし、蔵訳が *legs gro* か *rab gro* なので、**Yayā* と読む可能性は低いと考えられる。*Yayā* の名はマハーバーラタやプラーナ文献などにより、ヤーダヴァ族とバーンタヴァ族の祖先となる月種族の王の名としてよく知られている。仏典でも *Yayā* は『仏本行集経』や『大莊嚴論経』に王か仙人の名として耶耶坻、耶耶底、耶耶帝として出る。他方 *Suyāra* の名は Straube 博士によれば梵文『破僧事』 *Samghabhedavastu* (ed. Gnoli, II, 11) に出る。二人の隊商主 (*sarhāvāha*) のうちの一人の名であるが、しかしその『破僧事』の記述はハリバッタのこの第三一話と何も接点が無く、無関係である。『破僧事』ではその隊商主 *Suyāra* は辟支仏に成ったので、菩薩の前世とは見なされていない。このように *Yayā* も *Suyāra* も共に疑わしい。不明瞭な文字は *Prayana* という様な名である可能性もあろう。現在まだ本話の決定的なパラレル文献となる北伝の説話が見つかっていない以上、主人公の名が決定出来ない状態であるが、今は暫定的に本話の主人公の名として *Suyāra* の名の方を用いることにしたい。*Yayā* よりも *Suyāra* のほうが蔵訳の *legs gro* の語に近いのは確かである。

(28) 蔵訳 *srog shing* は梵語 **yasti* 「枝」の訳語であろう。HJM 8.24+, 12.55+ 等にその典拠がある。

(29) 蔵訳 *mngon spong ba* 「捨てる」はその動詞の意味が文脈に合わない。*rim gylis* 「ゆっくり」という副詞とうまく繋がる移動・歩行動作を示す、動詞の過去形が望ましい。Hahn (1996, 299) の推測のように *mngon *yong ba* の誤記であろうか。とりあえず私は「近づきました」と訳した。

(30) Hahn (1996, 261) は *chu* (水) を **mchu* (唇) と修正することを提案する。しかし *dar bai* **mchu* *ldan ma* 「わななく唇をもつ(女)は」と訳すと、微笑みのしぐさとして多少の違和感が生じる。*dar bai* は梵語の **sphurat* (燦めく) の訳であれば、「燦めく唇を

- もつ」と訳すことが出来るため、私は「燦めく唇を動かし」と訳してみたが、他方で「燦めく水を持ったまま」と訳す可能性も残る。
- (31) Hahn (1906: 262) によれば、バドラーが語る「最も優れた女」(‘vara) の表現は、「遊女」(‘vāra) を示唆する言葉遊びである。
- (32) この三一・二〇詩節は、黄金が熱せられるとその状態が次第に変化することに喩えている。不純物が出て来て、次第に美しくなったという意味に取ると、文脈にそぐわない。むしろ、乾式製錬法によってではなく、単純に熱せられた場合、未精錬の黄金は不純物のせいで汚く変化するということか。
- (33) 原文の *kyim* 「家」を *kyi* あるが *kyis* 「犬」と読むことを Hahn (2003: 73) は提案する。
- (34) 第三三話シャクラは蔵訳から判断して全七九詩節から成るが、第二七詩節の *pada a* の途中から第五一詩節の *pada b* の途中まで、本話の中間部分の梵文が写本の欠損により失われている。——なお本話のパラレル文献は今のところ、不明である。
- (35) 蔵訳では「足下に跪いた神々の群の (*hai shogāy*) 髻の宝珠」と記されるが、梵文の方にはその「神々の群の」という語が有るのなら、少なくとも (d) の修飾句は菩薩ではなく三十三天の王インドラを表現する修飾句になる。そこで私は蔵訳に従って「神々の群の」という語を補った上で、(a) (b) の句は菩薩にかかる表現、(c) (d) の句はインドラにかかる表現として和訳してみた。
- (36) 第三三話シャクラのこの第二七詩節以降、第五一詩節の *pada b* までの話の中間部分は、写本の一葉 (B 第85葉) の欠損によって梵文テキストが失われており、Khotchoe (2017) の英訳では訳されていないが、私は蔵訳からその箇所も訳す。
- (37) 「象の沐浴」という表現は *HJM 29.22+* にも *gajastānūrupam* の語で出ている。
- (38) 人間の寿命が八万歳であった時、婆羅門アラネーミは出家し、五百の婆羅門青年たちに寿命の短さについて説法した。このアラネーミの説話は中阿含 60 『阿蘭那経』や『六度集経』88 や『根本有部律薬事』などに見出される。そのパラレル文献の情報と『薬事』からの和訳は八尾史 (2013) pp. 429-431 を参照のこと。このアラネーミの説話は西域北道でも流行し、トゥムシユク語・ソグド語・ウイグル語・トカラ語 B の仏典としてもこの説話の写本があることが知られている。吉田豊 (2010) pp. 85, 188, 196, 200, 204 を参照。
- (39) 第五一詩節の「秋になれば雲は水を全く失いますし、蔓のような」までを蔵訳から訳し、それに続く文は梵文からの訳である。その後は章末まで梵文からの訳が続く。

- (40) 『法の身体』(dharmasarīra) という表現はアーリヤシューラの『シャータカマラー』でも第二話の六六詩節に出てくる。その箇所では『身体』(sarīra) と『法の身体』という二種の体が区別されて別々に扱われている。
- (41) 上の第七〇詩節は Haribhāṭa の作として Vallabhadēva の *Subhāṣṭāvālī* (2937) が引用し、異読を提供する。

参考文献

- Hahn, Michael (1979):** "Die Haribhāṭajātakamāla (III). Das Dardara-Jātaka". *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, Band XXIII (1979), S. 75-108.
- (1980): "Die Haribhāṭajātakamāla (IV). Das Udayajātaka". *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, XXIV, S. 99-128.
- (1996): *Lehrbuch der klassischen tibetischen Schriftsprache*, 7., korrig. Auflage. Swissal-Odendorf. Indica et Thibetica, Band 10.
- (2003): *Schlüssel zum Lehrbuch der klassischen tibetischen Schriftsprache und Beiträge zur tibetischen Wortkunde. Miscellanea eymologica tibetica I - VI*. Marburg: Indica et Thibetica, Band 10a.
- (2005): "Haribhāṭa and the Mahābhārata". *Journal of Buddhist Studies* (Centre for Buddhist Studies, Sri Lanka), 3, pp. 1-41.
- (2011a): *Poetical Visions of the Buddha's Former Lives. Seventeen Legends from Haribhāṭa's Jātaka-māla*. Delhi: Aditya Prakashan 2011. [CD attached]
- Hahn, Michael & Schmidt-Gimzew, Helwig (1979):** "Die Legende von Dardara und Upadardara in der Fassung des Tsa-Pao-Tsang-Ching", *Monumenta Serica*, Vol. 34 (1979-1980), pp. 219-262.
- Straube, Martin (2018):** "Once again on the Śākyaśimhājātaka". 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』二二号、二四五～二五八頁。
- (2019): *Haribhāṭa's Jātakamāla. Critically edited from the manuscripts with the help of earlier work by Michael Hahn*. Pune Indological Series II, Dept. of Pali, Savitribai Phule Pune University, Pune.
- 八尾史 (2013) : 『根本説一切有部律業事』 連合出版。
- 吉田豊 (2010) : 「第4章出土資料が語る宗教文化―イラン語圏の仏教を中心に―」、奈良康明 石井公成編『新アジア仏教史 05 中央アジア文明・文化の交差点』、俊成出版社、一六六～二二五頁。

最後に、これまで『哲学年報』に連載してきたハリバッタの(一)～(六)の論文にある誤記を、正誤表の形で挙げておきたい。

	論文・頁・行	誤	正
(一)	(2018年) 108頁 10行	ヴィドヤーダラ	ヴィディヤーダラ
(二)	(2019年) 75頁 3行	ハイビスカス	ブツソウゲ
(二)	(2019年) 101頁 14行	(II)はルル鹿本生 (runniga J 482)	↓ 削除
(三)	(2020年) 62頁 18行	ビンロウジ (檳榔子)	キンマ (蒟醬) の葉
(三)	(2020年) 84頁 2行	ヴィドゥヤーダラ	ヴィディヤーダラ
(六)	(2023年) 60頁 2行	しながら「岸辺に」いました	しました
(六)	(2023年) 61頁 15行	供物の食物を供え	火を供養し

※本研究は JSPS 科研費 (21H00470) の助成を受けたものである。